纒向遺跡

昭和55年度遺跡範囲確認発掘調査概報

桜井市教育委員会

序

桜井市は青垣山の一画を占め、市のほぼ中心に位置する市庁舎から古代より歌によまれる三輪山をはじめ大和三山が一望の下に見渡すことができます。この他古墳時代の代表的な遺跡である箸墓古墳・茶臼山古墳・メスリ山古墳等史跡に指定された古墳時代前期の古墳、秋殿古墳・舞谷古墳等古墳時代後期より終末期の大古墳群である鳥見山や飛鳥時代から奈良時代の寺院址等、人々の生活を知る上で重要な文化財が本市には数多く残されています。これらの遺跡を保護し啓蒙するための事業の一部として纒向遺跡の発掘調査を実施しております。

本書に記しています纒向遺跡は昭和54年度より桜井市が国・県の補助を受け緊急調査を継続事業として実施している広範囲に広がる大遺跡です。

調査を実施するにあたりましては奈良県教育委員会橿原考古学研究所、末永雅雄博士、有光教一博士の両所長をはじめ研究所員の諸氏、厳寒の中数度に渡り発掘現地で材質鑑定していただいた嶋倉巳三郎博士、厳しい季候にもめげず発掘調査から遺物整理、概報作成に協力された作業員の方々・学生諸君、発掘調査に協力いただいた纒向幼稚園の諸先生、地主及び地元協力者の方々に深くご厚礼申し上げます。

この多くの皆さまの御協力に基づいて集録された本書が、昭和55年度に制定しました桜井市文化財保護条例と共に文化財保護の一助となり古墳時代前期を学ぶ一資料として活用されますよう願ってやみません。

桜井市教育委員会

教育長　西　村　　司

例　　言

1. 本概報は、55年度国庫補助事業として奈良県桜井市が主体となり桜井市教育委員会が実施した纒向遺跡緊急及び範囲確認調査の概要であり本書に記した資料は主として大字巻之内字馬場ワキ、及び旧纒向小学校跡地の発掘調査概要報告書である。
2. 本年度実施した纒向遺跡の調査地点は５ケ所であり、内３ケ所で発掘調査を実施し、他は立会調査とした。

   各調査の所在地番、調査期間は次のとうりである。

   A調査地

   ◦桜井市巻之内565－1番地、564番地（喜多　保氏所有水田）

   ◦昭和55年５月13日～６月22日

   B調査地

   ◦桜井市大字辻24番地他（旧纒向小学校跡地）

   ◦昭和55年７月21日～昭和56年３月31日

   C調査地

   ◦桜井市大字巻之内（小西建次郎氏所有水田）

   ◦昭和55年６月８日・９日

   D調査地

   ◦桜井市巻之内363の1（森　忠雄氏所有水田）

   ◦昭和55年８月13日～15日

   E調査地

   ◦桜井市太田、東田道路改良工事

   ◦昭和55年11月～昭和56年３月20日
3. 発掘調査及び遺物整理は奈良県立橿原考古学研究所の指導・協力のもとに桜井市教育委員会が実施した。本文に記載した土器図はA調査地土壙Ｉ出土資料である。他の資料は未整理のため記載できなかった。
4. 調査はE調査の一部を山本秀美氏の協力を受けた他、桜井市教育委員会社会教育課文化財係、技師萩原儀征が担当した。
5. 調査体制

   桜井市教育委員会事務局

教育長	西村　司
教育次長	嶋岡　一郎

社会教育課長　　渡辺　実恵
〃　指導首事　　南　正直
〃　係長　　森　幹雄
〃　主事　　森口　治
社会体育係長　　高松　隆司
〃　主事　　山名　定晃
文化財係長　技師　　萩原　儀征
〃　主事　　新屋敷啓順

調査員

萩原儀征

調査補助員

中村憲代(奈良大)、安田昭・山田清朝(立命大)、小住昌子(同志社大)、中山靖雄(大体育大)、羽田佳代(神戸商大)、長峯浩子(神戸大)

調査作業員

植田光雄、植西キヨ、北西藤一郎、嶋岡ミツコ、中森義雄、藤本ミサオ、堀井甚五郎、堀内カズエ

遺物整理及び概報作成

萩原儀征、中村憲代、安田昭、山田朝清、吉田真祐美、羽田佳代、木村雅代（同志社女子大）

植物質遺物の調査

嶋倉己三郎（関西外語大学教授）

6. 本概報の文責は萩原儀征にある。

目　次

Ⅰ　はじめに……1
Ⅱ　A調査地……2
1　調査の概要……2
2　遺構の概要……3
3　遺物の概要……6
Ⅲ　B調査地……22
1　調査の概要……22
2　遺構の概要……22

Ⅰ　はじめに

大和盆地の東南の一角、大和高原の清流を集めて流れる巻向川が三輪山の北、車谷から扇状地を形成し、大和川に合流する。この巻向川が形成する扇状地に纒向遺跡は展開している。この扇状地は谷口より西へゆるやかに傾斜しながら微高地が放射状に伸び、微高地間には古墳時代後期から鎌倉時代の遺物を含む旧河道が確認されており、巻向川の流路変更が幾度もあったことが推測できる。

現在まで発掘調査した地域では地下水位は高く、現地表下１ｍ以内で湧水があり、水利は良好と思われるが現在では平常時に上部を覆い水田とし、渇水期に覆いをとり使用する野井戸が作られている。

現水田下には中、近世の暗渠跡と思われる巾15cm～30cmの小溝がほぼ南北及び東西方向に掘られておりこの小溝には竹を埋設したものもあり、畑として利用する時の排水が考えられる。これらの事からも水利が良好であったことを示しているが、中近世以後には裏作としての畑作を考えることができるのではないか。

この地における集落は、穴師、巻之内、箸中、草川、太田、辻、大豆越、東田等であるが、太田等では今なお、環濠集落の痕跡をみることができる。

扇状地周辺の遺跡を古い時期から見ると三輪山麓から有舌尖頭器の採集が知られている他縄文時代の遺跡は三輪山麓部に後・晩期の土器と共に石器類が採集されている。纒向遺跡では旧河道等より

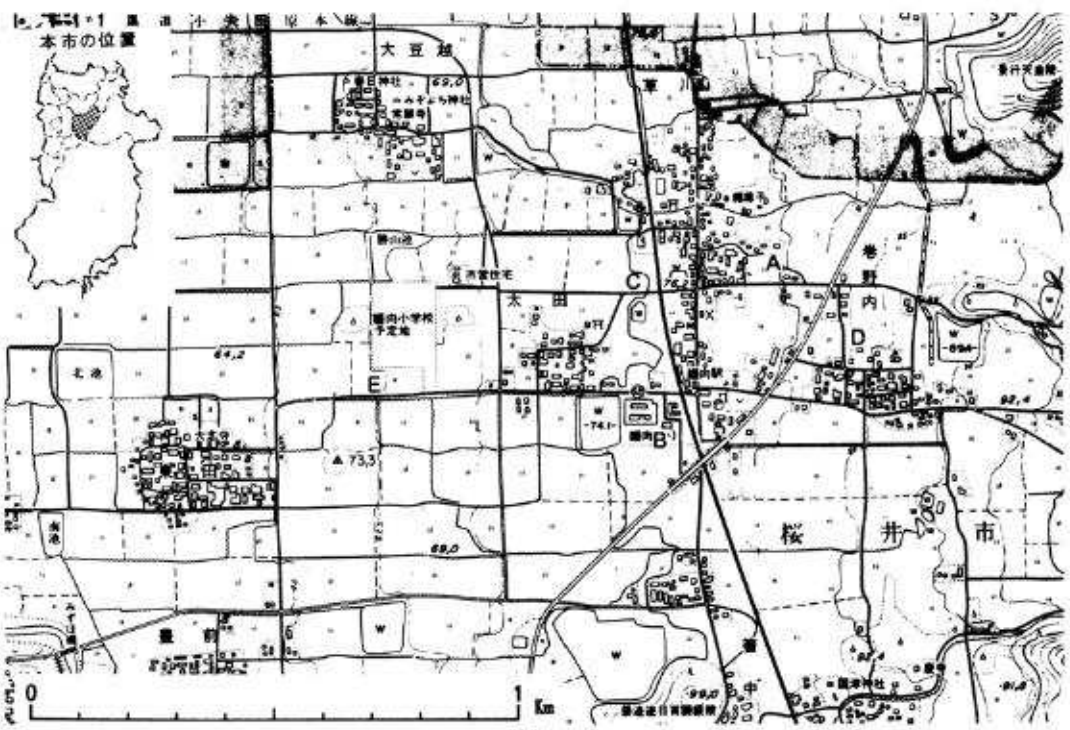


図1

後晩期の土器片が出土し、字南飛塚の地では小穴内より後期の深鉢が出土している。前者については巻向川によって上流部からはこばれてきた土器と考えられる。又後者については発掘範囲が狭いこともあり集落との関係等は不明であるが出土状態が小穴内に口縁部を横方向に埋没していることから棺の性格を持つと考えられる。

弥生時代の遺跡は、縄文時代と重複しており三輪山麓よりの出土が知られている、纒向遺跡では後期の土壙が報告されている。箸墓西遺跡では畿内第Ⅳ様式の方形周溝が検出されている。

古墳時代の遺跡では北の崇神陵をはじめとする柳本古墳群や三輪山麓部に祭祀遺跡や箸墓西遺跡箸墓古墳・狐塚等古墳時代前期から後期の古墳や遺物が散布している。

Ⅱ　A調査地

1　調査の概要（図版1）

この地は、「纒向」で推定された辻旧河道地帯の北側微高地に位置し、この地周辺から北は崇神陵との間の川に向ってゆるやかな傾斜をもって下っており、当初は纒向遺跡の北限が考えられていたが川の北側、天理市域にも遺物の散布地が見られる。

調査は南北に長い巾約4ｍ、長さ約20ｍの長方形の調査区を設定し、遺構の検出状態に応じて拡張する方法をとった。

調査区画の設定は、予定地西北角を基点とし、磁北をＹ軸として、これに直交する東西方向をＸ軸とする。区画は方4ｍ、区画名はＹ軸をアルファベットで表わし、Ｘ軸はアラビア数字で表わした。区画の呼称は区画西北角で交わるＸ軸・Ｙ軸で表わした。つまり調査地西北端の区画は1Ａとなる。

発掘区画は、Ｘ軸6ラインを中心に東西に2ｍ巾、Ｙ軸ＢからＧの巾4ｍ長さ約20ｍ、南北に長い長方形の発掘区画を設定した。

2　遺構の概要（図版1下）

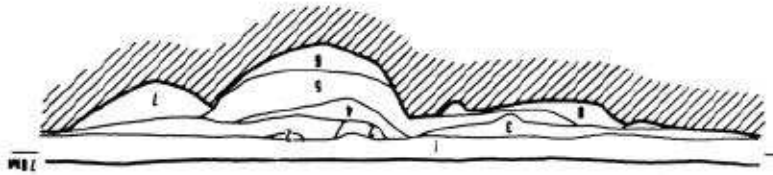
調査地は中近世以後の削平のため耕作土直下に地山があり、地山を堀り込んだ遺構が確認できる。地山は南方向にゆるやかな傾斜を示し、Ｃラインより北側は削平のためか遺構は検出できなかった。

この地で検出した遺構は、素掘の井戸状土壙2、溝1、南北方向に長く浅い土壙1、土器留、柱穴状小穴等である。なお、土壙Ⅰ・Ⅱ、土器留上部には須恵器片を含む層を確認しており5世紀後半期に整地が考えられる。

土　壙　Ⅰ（図版4）

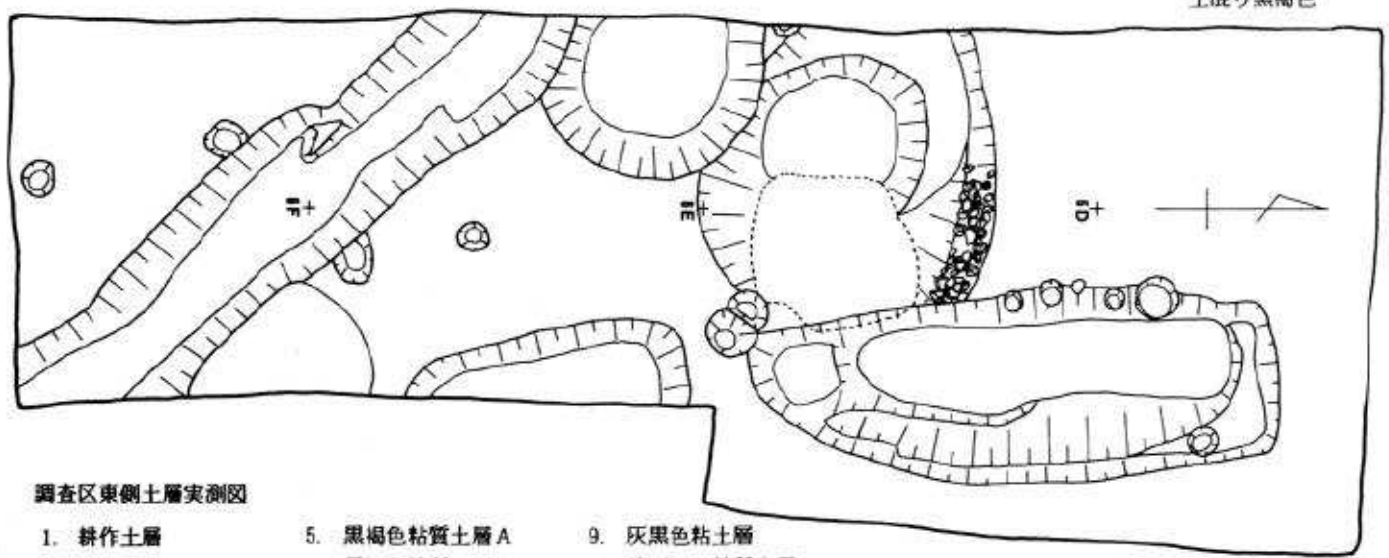
径南北約3ｍ、東西約4ｍ、東西に長いほぼ楕円形、深さ約1ｍの土壙である。土壙中央より東は径10～20㎝の礫による石積を東側肩部より底部にかけて検出した。土壙西側壁は肩部より約15㎝

図2　A調査地区遺構配置図



調査区西側土層実測図

1. 耕作土層
2. 炭灰焦土層
3. 黒褐色土層
4. 白黄褐色砂質土混り黒褐色
5. 黒褐色粘質土層
6. 暗灰色粘質土層
7. 淡灰褐色粘質土層
8. 灰褐色土層



調査区東側土層実測図

1. 耕作土層
2. 黒褐色土層A
3. 黒褐色土層B
4. 黒褐色砂質土層
5. 黒褐色粘質土層A
6. 黒褐色粘質土層B
7. 黒褐色土層C
8. 灰黒色粘質土層
9. 灰黒色粘土層
10. 暗灰褐色粘質土層A
11. 暗灰褐色粘質土層B
12. 暗灰褐色混土砂層

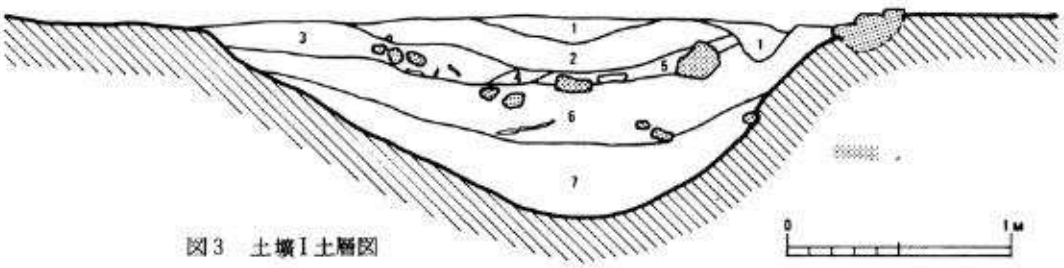


図3　土壙Ⅰ土層図

土　壙　Ⅰ（馬場ワキ）

1. 黒褐色土層
2. 黒褐色土混り炭灰焦土層
3. 暗灰褐色粘質土層
4. 暗灰褐色粘土層
5. 灰褐色砂質土層
6. 暗灰褐色粘土層
7. 灰褐色混土層

下より中央方向にやや傾斜した平坦部が削り出されている。土壙北側は土壙肩部に沿って巾約30～40cm、深さ約30cmの小溝に径約10～15cmの小礫を敷詰めた石敷が施されている。石敷の長さは土壙東側の遺構により削除されているが残存部で約1.4mを計ることができる。

土壙内の堆積層序は最下層より、灰褐色混土砂層・暗灰褐色粘土層・灰褐色砂質土層暗灰褐色粘土層・暗灰褐色粘質土層・黒褐色土混り炭灰焦土層・黒褐色土層である。壙底部は砂層（地山）を削っており湧水がある。最下層は湧水部に堆積しておりこの層堆積期間が井戸として使用されていたと思われる。第2層の粘土層は井戸としての機能が失なわれていく時期の堆積と推測できる。第2層以後は、土壙が窪地状となり放棄された以後の堆積と思われる。放棄された時期は黒褐色土混り炭灰焦土層内より五世紀後半期と思われる須恵器片を検出しているので、この時期には土壙の痕跡を残す状態であったと思われる。

壙内遺物出土状態は、最下層は少なく、下より第2層・第3層に最も多い。又出土遺物は有機質遺物は非常に少なく、土器が主体となっている。時期は最下層で鑵向Ⅲ式期（庄内期新）が出土しているので、土壙掘削期はこの時期が考えられる。

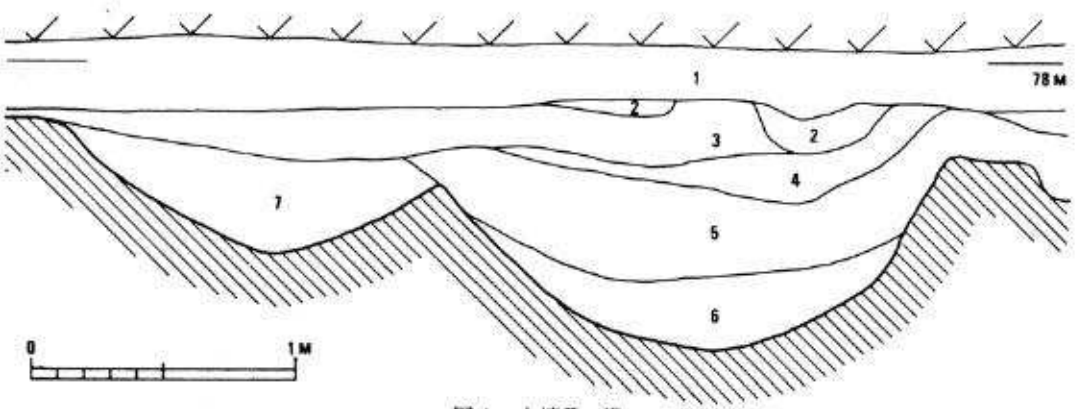


図4　土壙Ⅱ　溝

1. 耕作土層
2. 炭灰焦土層
3. 黒褐色土層
4. 白黄褐色砂質土混り黒褐色土層
5. 黒褐色粘質土層
6. 暗灰色粘質土層
7. 淡灰褐色粘質土層

土　壙　Ⅱ（図版５上）

径約２ｍ、深さ約0.８ｍ、平面はほぼ円形である。掘削時期は近接する土壙Ⅰ及び溝に粘土層が堆積した後であるが、土壙Ⅰ側より投棄によって形成されると思われる土器堆積がほぼ底部に達している事から、須恵器を含まない時期の掘削によるものと思われる。

土壙内堆積層序は最下層より暗灰色粘質土・投棄による土器堆積を包含する黒褐色粘質土層である。黒褐色粘質土の堆積後地山片が混入した黒褐色土によって埋められている。この埋土の上に黒褐色土の堆積が認められ、炭灰焦土層と共に、須恵器片を包含している。

遺物の出土状態は、壙底部に少なく大多数が投棄による土器堆積である。

溝（図版５下）

東南より北西方向に流れる巾約1.２ｍ、深さ約60cm、溝内堆積層序は、最下層より暗灰褐色粘土混り砂質土、暗茶褐色砂質土、暗灰褐色粘土層（投棄によると思われる土器堆積を包含する）、暗黒褐色土層である。各層の堆積状況は北東岸より南西方向へ傾斜した状態で堆積している。現地形、旧地形共に南西へゆるやかな傾斜を示していることから自然堆積と思われる。

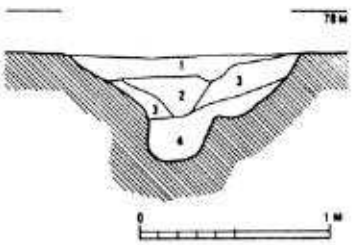


図５　溝

1. 暗黒褐色土層
2. 暗灰褐色粘土層
3. 暗茶褐色砂質土層
4. 暗灰色粘土混り砂質土層

土　器　留（図版２・３）

この土器留は土壙Ⅰに接して掘削された南北約5.５ｍ、巾約２ｍ、深さ40cmの窪地内に形成されたもので、窪地内に中央方向へ傾斜した状態で堆積した黒褐色砂質土層上に投棄されたと思われる。土器は吉備系、東海系の土器を含み庄内式・布留式期の土器が主であるが上層部には少量ではあるが古式の須恵器片を包含していることからこの時期以前に形成されたものと思われる。

ま　と　め

この調査地域の資料整理は、土壙Ⅰ出土遺物が実測できた段階で他は未整理であるが一応各遺構をまとめてみると遺構形成期をつぎの４期に分けることができる。第１期は土壙Ⅰ、溝、第２期は、土壙Ⅱ、土器留下のほぼ長方形に近い浅い土壙、第３期は土器投棄による土器堆積、土器留、第４期は五世紀代と思われる整地層の４時期である。各遺構の機能を検討してみると、土壙Ⅰ・Ⅱ共に最下層には遺物は少なく木製品や焦げた木、特殊遺物等は検出できなかった。又この地域の地下水位は高く、井戸としての機能は十分に果していたと思われ土壙Ⅰの石敷や、平坦部等は井戸に付属する施設と推測できる。溝および、土壙Ⅱへの土器投棄は、北より南方向へ投棄され、又辻旧河道が調査地南約40～50ｍを西方向に流れていたと思われる事から、庄内式期の後半から布留式期の居住地域がこれら遺構群の北及び東に考えられる。出土遺物には吉備、河内、東海系の土器を確認しており庄内期後半から布留期にかけて居住地域は広範囲に広がっていた事が推測できる。なお土器留より白色の粘土を検出している。

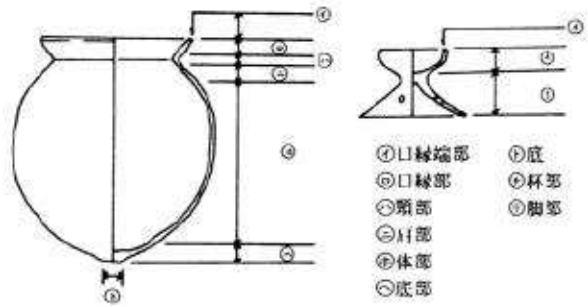
3　遺物の概要

表1　土器個体説明

註1　形態・法量は省略した。実測図によられたい。番号は実測図と一致している。図版にあるものは、その他の項に図版番号を記した。

註2　色調は主として「新版標準土色帖」によった。用語は原則として『観向』に準拠したが「板ナデ」については、板の木口によるものといわゆる「あらい刷毛目」を含みそれ以外は「刷毛目」とし、「篦ナデ」については「篦ミガキ」より器面に加える圧力が弱く表面がナメラカなものを言う。「砂粒」については径1㎜を越える砂粒については、「粗砂」又は「粗粒砂」とし、越えないものは「細砂」とした。

土器各部の名称について
（下図参照）



土　器　観　察　表

番号	器種	手法			色調	胎土	その他
		口縁部	体部外面	体部内面			
1	壺A2	端部板ナデ。内面上部は端部と平行する板ナデ、下部は横ナデ 外面上部横方行板ナデ、下部横ナデ 頸部内面板ミガキ、外面篦ミガキ			外表面、橙 内面、浅黄橙	3㎜以下の粗砂が比較的多く混入し、調整後の表面に露出。雲母片（2㎜以下）混入	焼成良好 径は復元
2	壺B	端部板ナデ後横ナデ 口縁部から頸部にかけての内・外面横ナデ			褐	3㎜以下の粗粒を含み、細砂混入。金雲母片若干多い	焼成良好 径は復元
3	壺C	端部横ナデ、擬横線を施す。 口縁部内面剥離の為不明、外面縦方向に篦ミガキ				3㎜以下の粗砂を多く含む	焼成良好 径は復元
4	壺D1	端部横ナデ	板ナデの後、縦方向篦ミガキ		にぶい橙	1㎜前後の砂と	焼成良好

		口縁部内面・外面上部は板ナデの後横ナデ、外面中部以下は板ナデの後篦ミガキ 頸部内・外面篦ナデ	底部は明確でない			多量の金雲母を含む	径は復元であるがほぼ完形 写真①
5	壺E	端部から外面口縁部・頸部に縦方向篦ミガキ 口縁部内面はやや左に傾斜した縦方向の篦ミガキ 頸部内面篦ナデ	縦方向の篦ミガキ	指頭圧痕有り	明赤褐	3㎜以下の粗砂を含み、細砂混入	焼成良好 完形
6	壺	内・外面共に口縁部板ナデ 頸部内面は横ナデ、外面は板ナデの後横ナデ	左上りの板ナデ	指頭圧痕、篦ナデの跡有り	灰白	粗粒砂・金雲母を含む	焼成良好 東海系
7	壺	内・外面共に口縁部から頸部は篦ミガキ	篦ミガキ	ナデ	灰白色に近い浅黄橙	6㎜以下の小石粗砂が混入 表面は調整により埋め込まれている	焼成良好 東海系？
8	壺	内・外面共に口縁部から頸部は横ナデ	縦方向の板ナデ後、ハケ調整	横ナデ	ややにぶい橙	3㎜以下の粗粒砂が多く混入	焼成良好 東海系
9	壺	口縁端部上面は横ナデした後、波状紋を施す 口縁部内・外面は中心へ向って放射状に篦ミガキ			にぶい橙	粗粒砂を含む	焼成良好 東海系
10	壺	外面頸部付近は横ナデ	篦ミガキの後、上部突帯の下を板ナデした後、管状のもので円形竹管紋を施す その下部に陵形紋状の篦ケズリ	縦方向の指頭ナデ 横方向の篦ナデも認められる	橙	粗粒砂を少し含む	焼成良好 径は復元
11	壺	外面口縁部は横方向の板ナデ 外面中央部に刻み目有り 内面上部は縦方向の板ナデ、下部は横方向の板ナデ			にぶい橙	粗砂・粗粒砂を多く含む 石英分が多い	焼成やや良 径は復元 西部瀬戸内系

番号	器種	手法			色調	胎土	その他
		口縁部	体部外面	体部内面			
12	壺	口縁部外面はナデ 下端にはつまみ上げが見られる。 内面は横方向のナデ 頸部外面は、上から順に縦方向のナデ、横方向のナデ 円形の浮文が上端部を巡る	肩部には横描きによる横線と波状紋	ナデ	淡赤橙	1㎜～2㎜の石英、金雲母を含む	焼成良好
13	甕A1	端部横ナデ 口縁部から頸部にかけて、内面はナデ、外面は横ナデ	箆ミガキ	ナデ	にぶい赤褐に近い明赤褐	3㎜以下の粗砂混入 金雲母の細片が比較的多く混入	焼成良好 完形 写真②
14	甕A1	端部は面を持ち横ナデによるつまみ上げ、二条の凹線を持つ。 口縁部内・外面は板ナデの後横ナデ 頸部内・外面箆ナデ	上半部は口縁と平行、下半部は右上りのタタキ。二者の境は粘土を張り付けて接合。	ナデ	にぶい褐	1㎜未満の細砂を多く、金雲母を少し含む	焼成良好 完形 写真④
15	甕A2	口縁部内・外面横ナデ 頸部内面板ナデ	若干右上りのタタキ		にぶい橙	粗い胎土で粗粒砂、細砂を多く含む	焼成やや良 径は復元
16	甕A2	口縁部内・外面横ナデ 頸部内面横ナデ後箆削り、外面タタキ後横ナデ			明赤褐に近いにぶい赤褐	2㎜以下の粗砂混入 金雲母の細片若干多い	焼成良好 径は復元
17	甕A2	端部板ナデ 口縁部より頸部にかけての内外面横ナデ	やや左上りのタタキ	タテ方向の箆ケズリ	淡橙に近い橙	5㎜以下の粗粒砂を含む粗砂混入	焼成良好 径は復元
18	甕A2	端部内面、右上りの板ナデ 口縁部内面、やや右上りの板ナデ	左へ傾斜した縦方向の板ナデ		灰黄褐に近いにぶい黄褐	2㎜以下の粗砂及び2㎜以下の金雲母片が調整後の内外表面に多い	焼成良好 径は復元

19	甕A2	端部は横ナデによる面有り 口縁部内面は横方向の板ナデ後横ナデ、外面は上半部を横ナデ、下半部をやや左上りの板ナデ後横ナデ	右上りの粗いタタキ（中部へ行くに従い平行に近くなる） その後、縦方向に板ナデ 底部から体部にかけて赤色顔料付着	体部から底部にかけて左回りの板ナデ（底部に放射状の起点）	淡橙	金雲母と1㎜前後の小石を含む	焼成やや良 完形
20	甕A2	口縁部内・外面横ナデ	右上りのタタキ（底部付近ではぼ水平）	箆ケズリ	浅黄橙	2～3㎜の粗粒多い（石英含む）	焼成良 完形　写真⑤
21	甕A3	口縁部内・外面横ナデ、内面下部は板ナデの後横ナデ 頸部外面は接続痕が見られ、やや左上りの板ナデ	右上りのタタキ	やや左上りの板ナデ	黒褐に近い褐	5㎜以下の粗粒砂を含む粗砂混入（表面調整により埋め込まれる）金雲母細片混入	焼成良好 径は復元
22	甕A3	口縁部内・外面横ナデ、外面ス ス付着 頸部に接続痕	やや右上りの凹凸の浅いタタキ 肩部以下ス ス付着	縦方向の箆ケズリの後、横ナデ	浅黄橙に近い橙	粗砂混入（表面調整により埋め込まれる） 金雲母細片混入	焼成良好 径は復元
23	甕A3	口縁部及び頸部内・外面横ナデ	やや右上りの荒いタタキ	箆ケズリ	明赤橙に近い橙	5㎜以下の粗砂混入。金雲母細片若干混入	焼成良 径は復元
24	甕A3	上端から外面の口縁部より頸部にかけて横ナデ 内面口縁部板ナデ後横ナデ、頸部横ナデ	やや右上りの横ナデ（頸部に近い所はタタキ後横ナデ）	軽い箆ミガキ	明赤褐に近い橙	2㎜以下粗砂混入	焼成良好 径は復元
25	甕A3	外面縦方向の櫛目 上端内面に磨滅、外面に箆キザミが認められる	縦方向の櫛目	ナデ？	橙に近いにぶい橙	粗砂を含む砂粒多い。橙色の酸化土（土器？）の粗粒若干混入	焼成良好 完形 写真⑥
26	甕A3	端部内面横ナデややつまみ上げ、外面板ナデ 口縁部内・外面横ナデ	右上り荒いタタキ	右上り方向、箆ケズリ	橙	1㎜前後の細砂と金雲母片を含む	焼成良好 径は復元

番号	器種	手法			色調	胎土	その他
		口縁部	体部外面	体部内面			
		頸部内面指頭圧痕、外面タタキの後横ナデ					
27	甕A3	内部、表面剥離の為不明 外部、横ナデ	右上りの荒いタタキ（肩部内・外面に指頭圧痕）	上部、左上りのハケ 中部以下、縦方向のハケ	明赤褐に近い橙	3㎜以下の粗砂をふくむ砂粒（石英？）多い	焼成良好 径は復元
28	甕B	口縁部内・外面横ナデ 頸部内面箆ケズリ後横ナデ、外面やや左に傾斜する縦方向の荒いハケ調整	やや左に傾斜するタテ方向の荒いハケ調整	箆ズリ後横ナデ	にぶい橙に近い橙	3㎜以下の粗砂混入 金雲母細片若干混入	焼成良好 径は復元
29	甕B	口縁部内・外面は横ナデ 上端部より口縁部外面にかけてスス付着	やや左上りの浅く荒いタタキ スス付着	箆ケズリ	橙に近いにぶい橙	細砂及び金雲母細片混入	焼成良好 径は復元 河内系？
30	甕B	口縁部及び頸部の内・外面横ナデ	左上りのタタキ	横方向の箆ナデ	褐色に近い黄褐	5㎜以下の小石を含む粗粒砂が混入（表面調整により埋め込まれる）	焼成良好 径は復元
31	甕B	口縁部内面板ナデ後横ナデ、外面板ナデ 頸部内面板ナデ後横ナデ、外面タタキ後横ナデ	上部、口縁とほぼ平行のタタキ 中部、左上りのタタキ 下部、箆によりタタキを消す 中部以下にスス付着	箆ケズリ	明赤褐に近い橙	2.5㎜以下の粗砂混入 4㎜以下の金雲母片混入	焼成良好 径は復元
32	甕B	口縁部内・外面横ナデ	全体に左上りのタタキ（上部はタタキの後、やや左上りの横板ナデ）	横方向の箆ケズリ	明褐	3㎜以下の粗砂が若干混入、金雲母細片比較的多く混入	焼成良好 径は復元 河内系？
33	甕B	口縁部内・外面の上部は横ナデ、外面下部より頸部にかけてタタキの後横ナデ	やや左上りの横方向のタタキ 底部はタタキ後板ナデ	左り上りの箆ケズリ	にぶい橙に近い橙	3㎜以下の粗砂含む細砂、金雲母混入	焼成良好 径は復元 河内系？

34	甕C	口縁部内・外面横ナデ	やや右上りのタタキ	横方向篦ケズリ	浅黄橙	細砂多く含む	焼成良好
35	甕H	口縁部内・外面、横ナデ 頸部内面、横方向板ナデ	全体に至る荒い板ナデ調整後、頸部から胴部にかけて串画凹線	体部上から、横ナデ、板ナデ後横ナデ、左上り板ナデ 底部、右回転の板ナデ 脚部、横ナデ	灰色に近いにぶい橙	細砂、金雲母細片若干混入	焼成良好 径は復元 東海系
36	甕	口縁部内・外面横ナデ 外表面スス付着	横ナデ 外表面スス付着	篦ケズリ	浅黄橙	3㎜以下の粗粒砂を含む粗砂混入（表面調整により埋め込まれる）	焼成良好 径は復元 山陰系
37	鉢A	口縁端部つまみナデ	右上りのタタキ 底部左上りのタタキ 表面にモミ痕・刺突痕	左上りの板ナデ	褐に近い橙	3㎜以下の粗砂 金雲母細片混入	焼成良好 完形 写真⑦
38	鉢D	上端部横ナデ 口縁部内面板ナデ、外面横ナデの後篦ナデ 頸部内面は板ナデの後篦ナデ、外面はタタキの後横ナデ	上部、板ナデ 下部、縦方向ハケ後篦ミガキ	篦ナデ	明赤褐	金雲母片を多く含む	焼成良好 径は復元
39	鉢D	口縁部内・外面横ナデ 頸部外面に横方向タタキ	タタキの後篦ケズリ	縦方向のハケ	にぶい橙に近い橙	粗砂混入	焼成良好 径は復元
40	鉢D	口縁部内・外面板ナデ 頸部に収縮が見られる	横ナデ		赤褐	金雲母細片を含む	焼成良好 径は復元
41	鉢D	端部横ナデ 口縁部内面は縦方向、外面は右上りのナデ 頸部外面は板ナデの後ナデ	やや左へ傾斜した縦方向の板ナデの後、横方向あるいはやや左上りの篦ナデ	左上りのナデ	内面一灰白 外面一にぶい橙	1㎜前後の細砂混入	焼成やや良 径は復元
42	鉢D	端部横ナデ 口縁部内面は板ナデの後横ナデ 外面は横ナデ	横ナデの後篦ミガキ	板ナデ、やや右上りの暗文状の篦ミガキの跡が見られる	にぶい橙に近い橙	金雲母細片を含む	焼成良好 径は復元

番号	器種	手法			色調	胎土	その他
		口縁部	体部外面	体部内面			
43	鉢D	上端部は横ナデ 口縁部内・外面は横ナデ	やや左上りの板ナデ	ナデ	淡橙	1㎜前後の細砂混入	焼成不良 径は復元
44	鉢D	口縁部内面は板ナデの後横ナデ 外面は横方向の板ナデ	板ナデの後ナデ 底部箆ケズリ	横ナデ	明赤褐	4㎜以下の粗粒を含む粗砂、金雲母の極細片若干混入	焼成良好 完形 写真⑨
45	鉢D	端部横ナデ 口縁部内面は指圧痕、外面はタタキの後指頭痕	右上りのタタキの後ナデ	粘土ひもの跡が見られる	赤褐	粗粒砂、細砂を多く含む。金雲母細片を含む	焼成不良 完形 写真⑧
46	台付鉢D	口縁部内面横ナデ、外面板ナデによる疑似凹線 頸部外面横方向の箆ミガキ 頸部に接続痕	箆ミガキ 脚部に4つの孔	横ナデ 胸部に絞り痕	明赤褐に近い橙	粗砂を含む細砂混入（表面調整により埋め込まれる）金雲母細片若干混入	焼成良好 ほぼ完成 写真⑪
47	高杯A	端部横ナデ 杯部内面上部箆ミガキの後横ナデ、中部箆ミガキ、下部箆ミガキの後横ナデ	脚部は縦方向の箆ミガキ 杯部と脚部の境に接続痕	脚部内面に絞り跡	にぶい橙	1㎜前後の細砂を含む	焼成良好 ほぼ完成
48	高杯A	口縁部ナデ 杯部内・外面縦方向箆ミガキ			にぶい赤褐及び明赤褐	3㎜以下の粗粒砂と金雲母片多く混入	焼成良好 径は復元
49	高杯A	端部つまみナデ 杯部内面上部横ナデ、下部箆ミガキ 外面箆ミガキ後板ナデによる疑似凹線	杯部より胸部にかけて箆ミガキ 脚部四方に孔	脚部内面横ナデ	明赤褐に近い橙	2㎜の粗砂・金雲母細片若干混入	焼成良好 ほぼ完形 写真⑩
50	器台			頸部より脚部にかけて剥離が著しい 脚部下部若干板ナデが見られる	橙に近いにぶい橙	粗砂及び金雲母細片若干混入	焼成良好 手ダスネによるものと思われる

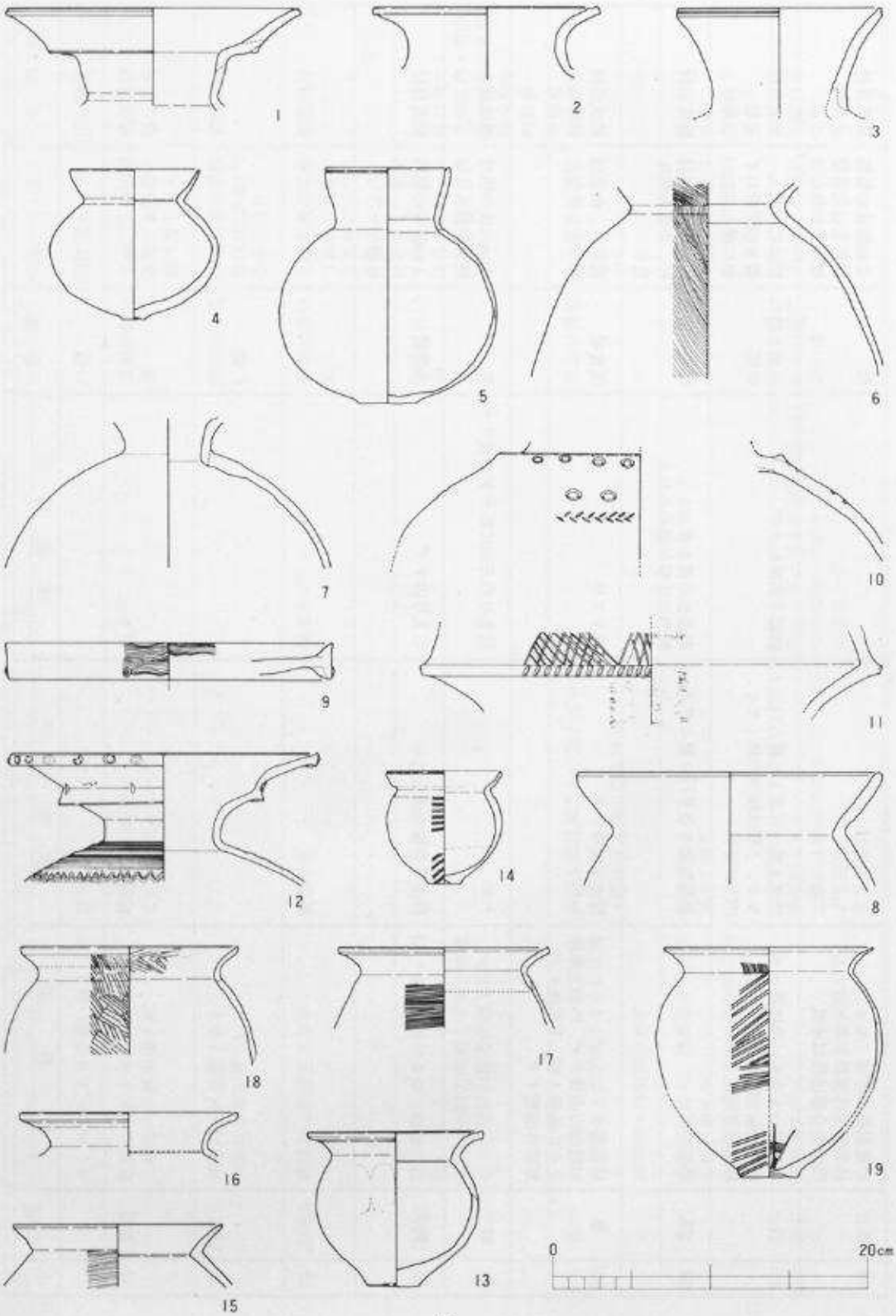
				底部は磨滅			
51	高杯？		篦ミガキ	横方向板ナデ	にぶい赤褐色	金雲母・石英・粗粒砂を含む	焼成良 径は復元
52	器台？		脚部上部は篦ミガキ 下部はタタキの後篦ミガキ 最下部は板ナデの後篦ミガキ 脚部四方に孔	脚部上部は左上りの板ナデ 下部は板ナデの後横ナデ	にぶい黄褐	細砂・金雲母細片を含む	焼成良好 径は復元
53	壺A1	内面篦ミガキの後櫛による施文 外面上端は、櫛状に横方向板ナデ後横ナデをし、その上から櫛による施文 端部外面に篦キザミ	篦ミガキ	篦ミガキ	橙	1.5㎜以下の粗砂混入 金雲母若干混入	焼成良好 径は復元
54	壺A1	内面端部横ナデ、口縁部及び頸部篦ミガキ 外面口縁端部は板ナデをした後に、櫛書波状文後竹管円形浮文を施す 頸部以下は篦ミガキ	篦ミガキ		にぶい赤褐に近い橙	2㎜以下の粗砂金雲母混入	焼成良好 径は復元
55	壺B	口縁部内面篦ミガキ 外面板横ナデ後、外面口縁部より頸部にかけて縦方向の篦ミガキ	篦ミガキ 内・外面ともに剥離が著しい	表面剥離の為不明	橙	1㎜以下の砂混入（砂は白色が多い）	焼成良 径は復元
56	甕A1	内面口縁部横ナデ、頸部篦ケズり後横ナデ 外面横ナデ	上部横ナデ 下部横方向タタキ	ナデ〔一部、上より篦状のもので表面を掻き降ろす〕	外面—やや暗い褐色 内面—黒褐色	2㎜以下の粗粒砂・金雲母片含む	焼成良好 完形 写真③
57	甕A2	端部つまみナデ 内面口縁部表面若干剥離、頸部横ナデ 外面口縁部及び頸部タタキ後横ナデ 外面口縁部にスス付着、頸部に	タタキ 肩部より下にスス付着		明褐	2㎜以下の細砂・金雲母細片多い	焼成良好 径は復元

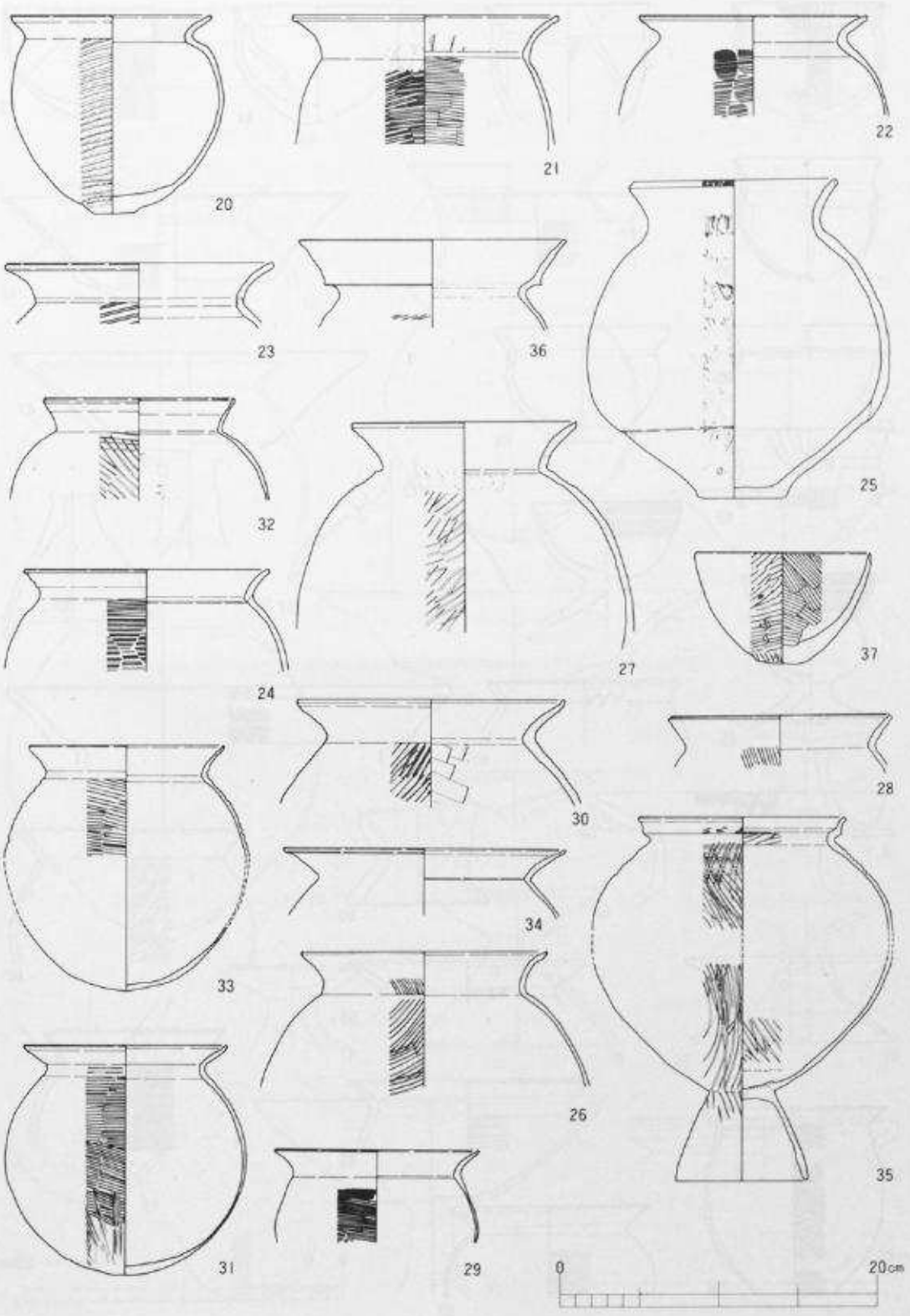
番号	器種	手法			色調	胎土	その他
		口縁部	体部外面	体部内面			
		折り返し痕					
58	甕A2	端部及び口縁部内・外面横ナデ 頸部内面横ナデ、外面タタキ	タタキ（肩部に指頭圧痕）	上部、横ナデ 中部以下、右上りの板ナデ	明黄褐	金雲母細片多い 粗粒砂若干混入	焼成良 径は復元
59	甕A2	内面横方向板ナデ 外面横ナデ、頸部縦の板ナデ	やや右上りのタタキ 頸部縦方向板ナデ	板ナデ（ケズりぎみ）	暗赤褐に近いにぶい赤褐	若干粗砂を含む細砂多い 2㎜以下の金雲母片多い	焼成良好 径は復元
60	甕A2	口縁部内、外面横ナデ 頸部外面、上張り付け後やや左に傾斜する縦方向板ナデ	左上り板ナデ	目の浅い板ナデ後横ナデ	明赤褐に近い橙	2㎜以下の粗砂・金雲母細片若干混入	焼成良好 径は復元
61	甕A2	内面横ナデ 外面横方向タタキ後横ナデ	横方向タタキ	左上りの板ナデ	明赤褐に近い橙	9㎜以下の粗砂・金雲母細片若干混入	焼成良好 径は復元
62	甕A2	内面板ナデ後横ナデ 外面頸部、指頭圧後張り付けによる補修有り	肩部、若干右に傾斜する縦方向板ナデ 体部、右上り板ナデ、スス付着	ナデ	橙	2㎜以下の粗砂・金雲母細片混入	焼成良好 径は復元
63	甕A2	内・外面横ナデ 頸部外面に指頭圧痕有り	横ナデ	横ナデ	明赤褐に近い橙	金雲母細片かなり多く見られ細砂混入	焼成良好 径は復元
64	甕A3	端部つまみ上げ 口縁部内面横ナデ（磨滅痕見られる）、外面上部板ナデ後横ナデ、下部横ナデ 頸部内面は目の細い板ナデ、外面は目の荒い板ナデ	やや左に傾斜する縦方向の目の荒い板ナデ 肩部に接続痕が認められる	上部に指頭圧痕 下部は板ナデ後横ナデ	灰色に近い浅黄橙	2㎜以下の粗砂（調整により埋め込み） 金雲母細片混入	焼成良好 径は復元
65	甕A3	口縁部内・外面横ナデ 頸部外面タタキ後横ナデ 端部より口縁部外面にかけてス	頸部より肩部にかけてタタキ痕が見られる 肩部から下部は口縁とほぼ平行	横方向に箆ケズリ 粘土ヒモの痕が見られる	明褐	2㎜以下の粗片を含む細片の金雲母片を多く含	焼成良好 径は復元 河内系？

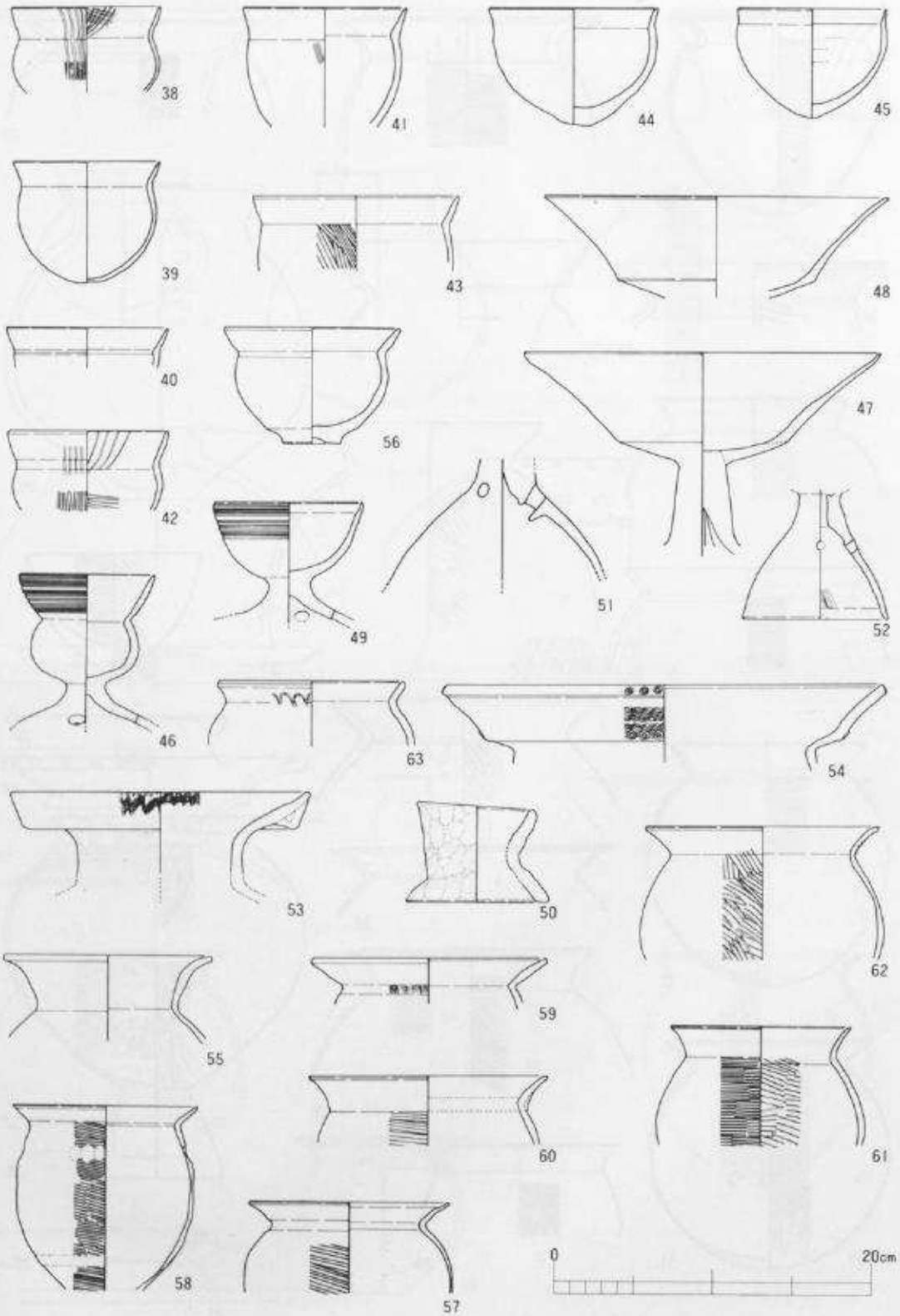
		ス付着	する突出部の細いタタキ 表面にスス付着			む	
66	甕A3	端部つまみナデ 口縁部内・外面横ナデ 端部より口縁部外面にかけてスス付着	ほぼ口縁と平行する若干右上りのタタキ 肩部以下にスス付着		若干明るい赤褐 表面二次的加熱の為か暗く変色している	細砂混入、1㎜以下の金雲母細片多く含む	焼成良好 径は復元
67	甕	端部は外側へ折り曲げつまみナデ 口縁部内面篦ミガキ・外面横ナデ 頸部内面は横ナデ	篦ミガキの後所々ハケ目が入っている	篦ケズリ	橙に近いにぶい橙	粗砂を比較的多く含む（外面は調整により埋め込まれている）	焼成良好 径は復元
68	甕B	上端部つまみナデ 口縁部内面目の浅い横方向板ナデ、外面右上りタタキ後横方向目の浅い板ナデ	肩より上部右上りタタキ 肩部は内側よりの指頭圧により若干ふくれている 下部タタキ後まだらに若干右に傾斜した板ナデ 底部左上りタタキ、底板ナデ	上部外方向指頭圧痕 篦ケズリ	明褐に近い褐	金雲母細片及び2㎜以下の粗砂を含む細砂混入	焼成良好 径は復元
69	甕B	端部つまみナデ 口縁部内面端部と平行する板ナデ、外面タタキの後横ナデ 頸部内面横ナデ、外面タタキの後横ナデ	やや左上りのタタキ	篦ケズリ	橙に近い明赤褐	細砂及び2㎜以下の金雲母片多く含む	焼成良好 径は復元
70	甕C	端部つまみナデ 口縁部内面横ナデ、外面タタキ上げの後横ナデ	右上りのタタキ（タタキの重ねが密） 下部スス付着、底部スス無	右上りの篦ケズリ	黄褐	粗砂及び細砂、金雲母多く混入	焼成良好 径は復元 河内系？
71	鉢D	口縁部内面板ナデの後横ナデ 外面左上りのタタキの後横ナデ	上部横方向のタタキ 体部縦方向の篦ケズリ 下部右上りのタタキ	中央部より左上りの板ナデ 下部指圧痕	橙、一部白色の所がある	6㎜以下の粗粒砂を含む	焼成良好 完形 写真⑩
72	鉢D	口縁部内面右上りの細い篦ミガ	右へ傾斜した縦方向の細い篦ミ	縦方向の細い篦ミガキ	明赤褐に近	細砂及び金雲母	焼成良好

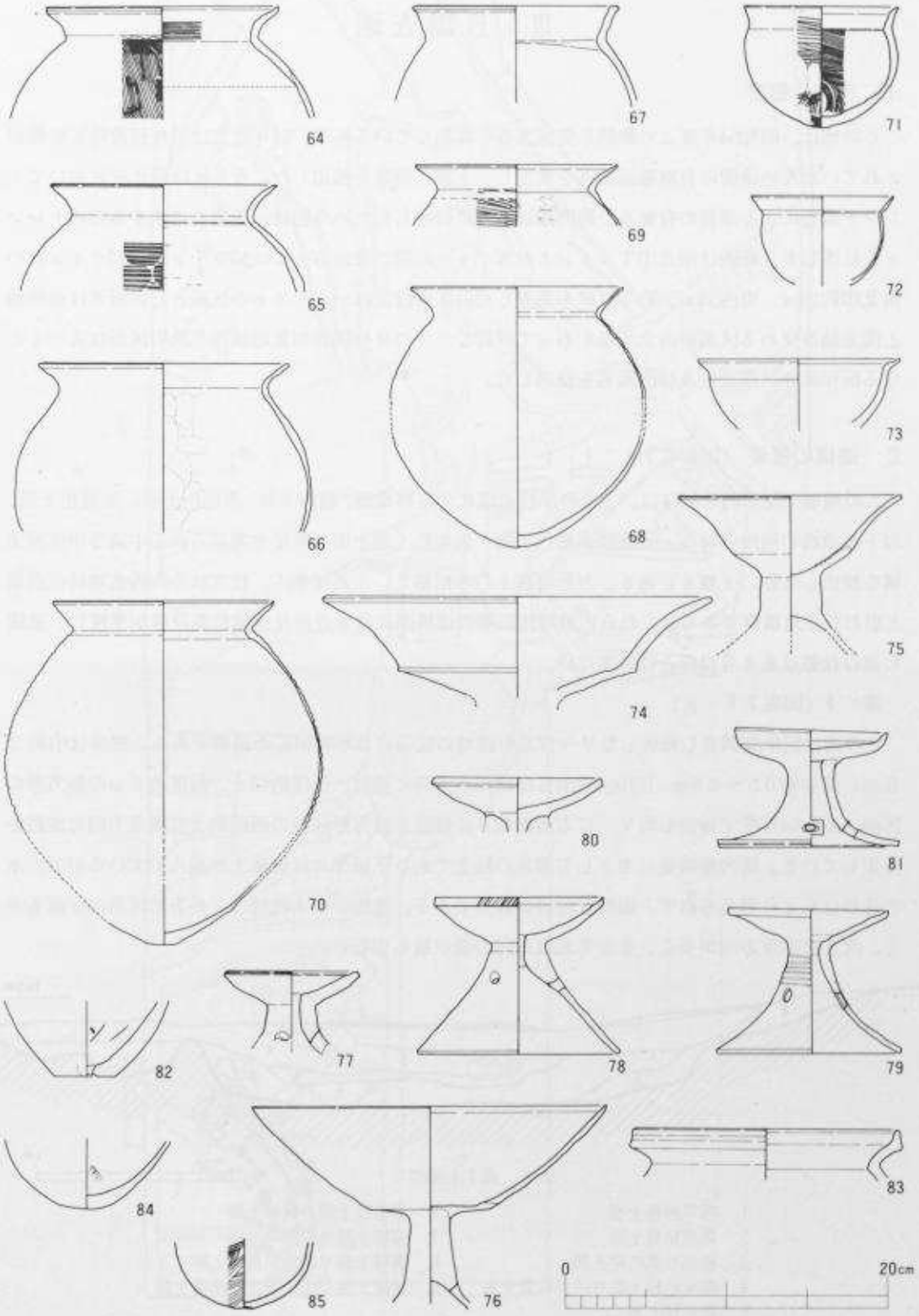
番号	器種	手法			色調	胎土	その他
		口縁部	体部外面	体部内面			
		キ、外面左上りの細い篦ミガキ	ガキ		い橙	細片混入	径は復元
73	鉢E	端部つまみナデ 口縁部内・外面横ナデ	肩部縦方向板ナデ その他右上り板ナデ	板ナデ	黄橙に近い橙	2㎜以下の粗粒砂及び金雲母の細片若干混入	焼成良好 径は復元
74	高杯A	杯部内・外面篦ミガキ 内面は剥離が著しい			明赤褐に近い橙	3㎜以下の粗粒砂(白色が多い)を多く含む	焼成良好
75	高杯A	杯部内・外面篦ミガキ	脚部ナデ	脚部ナデツケ	明褐に近い橙	2㎜前後の粗砂(表面に露出)金雲母の細片若干混入	焼成良好
76	高杯A	端部縦篦ミガキの後横ナデ、剥離している 杯部内面縦方向篦ミガキ、外面若干右傾斜の縦方向篦ミガキ	脚部三方等間隔に穿孔		明褐に近い褐	5㎜以下の粗粒砂含む細砂、金雲母細片多く含む	焼成良好 径は復元 全体に内・外面とも表面赤色顔料を施す 写真⑫
77	器台	端部横ナデ 口縁部内・外面篦ミガキの後横ナデ 杯部内・外面篦ミガキ	脚部上部は縦方向の篦ミガキの後横ナデ 下部は縦方向の篦ミガキ		にぶい黄褐	2㎜前後の粗粒砂多く、金雲母少し含む	焼成良好
78	器台	端部面を持ち、篦による刻み目 口縁部横ナデ 杯部内面篦ミガキ、外面縦方向篦ミガキ	脚部縦篦ミガキ 三方に穿孔	脚部板ナデの後横ナデ	にぶい赤褐	粗粒砂、金雲母2㎜以下の粗片及び細片比較的多く混入	焼成良好 完形 河内系？ 写真⑭
79	器台	端部横ナデ 口縁部外面篦ミガキ 杯部内面使用の為か剥離が著しく不明、外面篦ミガキ	脚部篦ミガキ 上部には串画凹線（フリーハンドで施文） 三方に穿孔	脚部上部は篦ミガキ状に仕上げ中央部篦ナデ状？ 下部板ナデ	にぶい橙に近い橙	2㎜以下の粗砂を含む細砂を含む金雲母細片若干認められる	焼成良好 完形 写真⑬

80	器台	口縁部横ナデ 杯部内・外面篦ミガキ 内面中心部に指頭圧痕			橙	2㎜前後の粗粒砂多く、金雲母細片少し含む	焼成良好
81	器台	口縁部つまみあげ後横篦ナデ 杯部内面剥離が著しく不明 外面縦方向篦ミガキ	脚部上部は杯部より縦方向篦ミガキ、下部は横方向篦ミガキ、四方に穿孔	脚部下部横板ナデ	淡橙と橙の中間	粗砂若干混入 銀金の雲母わずかに混入	焼成良好 完形 写真㊱
82	瓶	不明	下部左上りの平行の篦ミガキ	右上りの篦ナデ 穀物の圧痕が認められる	にぶい黄橙	1㎜前後の粗粒砂、金雲母細片含む	焼成良好
83	甕	端部横ナデ 口縁部内面横ナデ、外面上部篦ナデの後横ナデ、下部横ナデ、頸部外面板ナデ	板ナデの後ナデ	篦ケズリ	浅黄橙	粗粒砂、金雲母細片少し含む	焼成良好 径は復元 吉備系
84	鉢？		ナデ	左上りの方向に板ナデの後ナデ	橙	1㎜前後の粗粒砂を多量に含む	焼成良
85	鉢？		右上りの板ナデ	右上りのナデ	浅黄橙	1㎜前後の粗粒砂を多く、金雲母細片を含む	焼成良好


1
2
3
4
5
6
7
10
9
11
12
14
8
18
17
19
16
13
15
0
20cm


20
21
22
23
36
25
32
27
24
37
30
28
33
34
35
26
31
29
0
20cm


38
41
44
45
39
43
48
40
56
47
42
49
51
52
46
63
54
53
50
62
55
59
61
60
58
57
0
20cm


64
67
71
65
69
72
66
68
73
75
74
70
80
81
82
77
78
79
84
83
85
76
0
20cm

Ⅲ　B調査地

1　調査の概要

この地は、昭和54年度より継続し発掘調査を実施している所で、54年度では学校建設時に整地がされていたため遺構の有無確認調査を実施し、土壙、構等を検出した。今年度は前年度においてトレンチ調査による遺構の有無及び範囲確認調査に終始したため今回は、遺構を追求するためトレンチを拡張した。範囲は南北巾Tラインより Wラインの間、東西方向には12ラインから20ライン間の南北巾約10m、東西33m、約330㎡を調査した。区画設定は一辺を4mの区画とし区画名は東西軸と南北軸が交わる区画の西北交点をもって呼称した。つまり調査対象地域西北角の区画はA－1となる前年度の区画設定及び区画名を使用した。

2　遺構の概要（図版6下・7上）

この地域の基本的な層序は、上より学校造成による整地層、耕作土層、茶褐色土層、黒褐色土層、以下各遺構の層序となる。遺構は茶褐色土層、黒褐色土層上面に暗渠と考えられる小溝等中近世遺構を検出した他、土壙4、溝6、方形周溝1、木棺墓2、土器棺墓1、柱穴状小穴等古墳時代前期と思われる遺構群である。これら古墳時代前期の遺構面には中近世及び学校施設跡が重複し、遺構の遺存状態はあまり良好とはいえない。

溝　1（図版7下・8）

この溝は前年度調査し報告したV－17方形窪地の拡張により検出した遺構である。規模は巾約2.8m、深さ約0.5～0.6m、U19区画からほぼ南西方向に流れ、長径約10m、短径約6mの長方形の区画（昭和54年度で報告したV－17方形窪地）に接続し長方形区画の西南角より南東方向に流路を変更している。溝内堆積層は主として黒色の粘土であり下層部には腐植土が混入しているので、水の流れはあまり考えられず、堰的な性格が推察できる。遺物の出土状態は、長方形区画内が最も多く、次ぎに南東方向が多く、そして北東方向の溝が最も少ない。

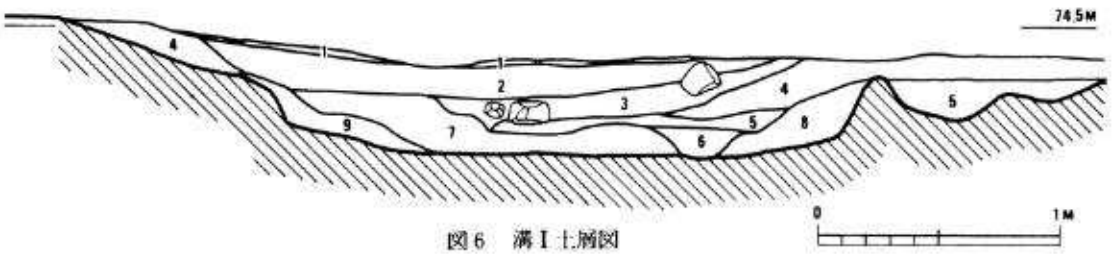
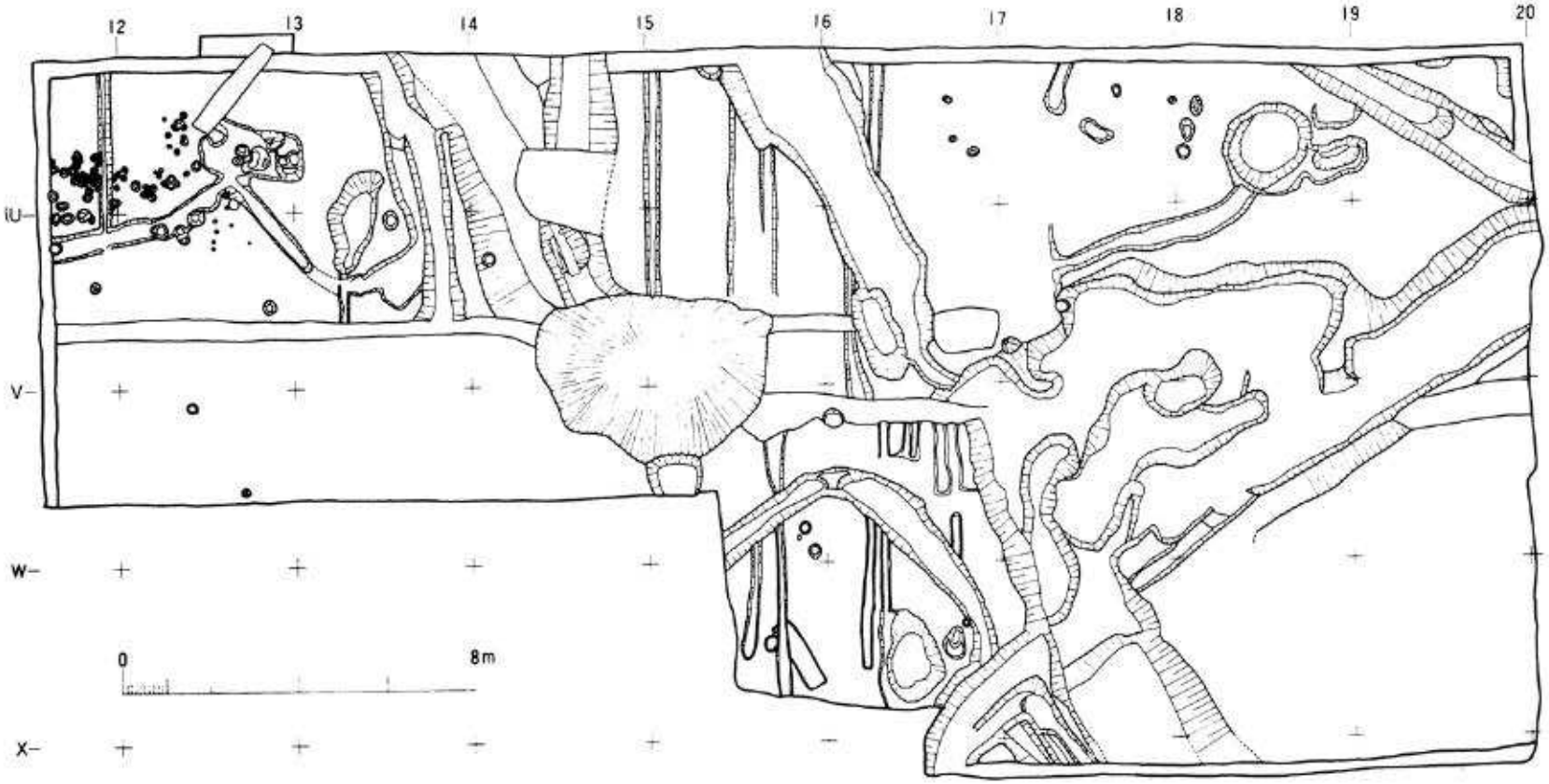


図6　溝1土層図

1. 暗黒褐色土層
2. 黒色粘質土層
3. 砂混り黒色粘土層
4. 暗灰色粘土混り灰色砂質土層
5. 黒色粘土層
6. 黒色粘土混り腐植土層
7. 腐植土混り黒色粘土層
8. 腐植土混り黒色粗砂質土層
9. 腐植土混り暗灰褐色粗砂質土層


12
13
14
15
16
17
18
19
20
U
V
W
X
0
8m

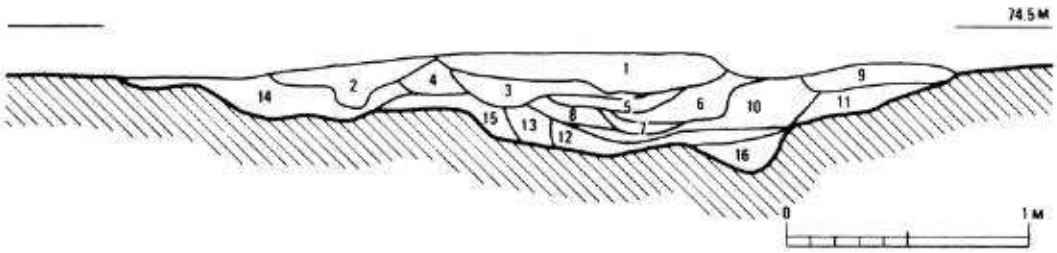


図7　溝Ⅱ土壙図

1. 茶褐色土層A
2. 茶褐色土層B
3. 暗茶褐色土層A
4. 暗茶褐色土層B
5. 黒褐色砂質土層A
6. 黒褐色砂質土層B
7. 黒色粘土層
8. 黒褐色粘質土層
9. 淡灰褐色砂質土層
10. 黒褐色砂質土層C
11. 灰褐色砂質土層
12. 黒色粘質土層
13. 暗灰褐色砂質土層A
14. 暗黒褐色砂質土層
15. 暗灰褐色砂質土層B
16. 黒色混砂土層

出土遺物には東海系、河内系の土器を若干含む、纒向Ⅲ式期を主体とする土器及び木・種子等の植物遺体等がある。

この溝により囲まれた南東部は方形区画の一角状を呈しているが、この地域は旧地形が高く、学校用地造成時に削平されたためか、造成土が地山上面に接しており、中近世以前の遺構は現在において検出できなかった。

方形周溝（図版9・10）

この遺構はV－15・16、W－15・16区画で、ほぼ直角に交わる溝二本とコーナーを二ケ所確認した。溝の方向は南東より北西、そして北西角よりほぼ直角に屈曲し南西へと連なっている。又南東角よりほぼ直角に屈曲し南西へ連なる溝の一部を検出しているので、北東部の溝は一辺約5mを計ることができる。東北溝と西北溝との交点及び東北溝と南東溝との交点は若干浅く掘残し溝中央部は若干深くなっている。溝内出土遺物は北東溝中央部で溝とほぼ平行して細長い加工木3点（図版10下）北東溝と北西溝の交点で纒向Ⅲ式期壺C（図版10上）の他若干の土師器片を検出した。壺Cは溝壁に接しており方形周溝の造営時期を考える重要な資料と思われる。主体部については溝壁部が断面U字形の相対的な立ち上りを示していること及び、近世の削平痕等より方形台地が著しく削平されたと思われるが方形周溝ほぼ中央の土壙状窪がその痕跡と推測する。土壙痕は長さ約1.6m、巾約0.45cm、深さ約10cm、方向は北東溝とほぼ平行している。遺物及び木棺痕は検出していない。

木棺1（図版11）

この木棺は昭和54年度で調査したV－15土壙より北へ流れる巾約1.6m、深さ約0.5m、纒向Ⅱ～Ⅲ式期と思われる溝・土壙Ⅱ（図版15）の埋没後に設営された小形の木棺である。木棺の規模は長さ約1.3m、巾約0.66m、削平されているが深さは残存部で約0.2mのほぼ角丸長方形の土壙である。棺は土壙底部にほぼ接して板を並べ、つぎに両側板を建て、木口板を両側板の間に差し入れ、

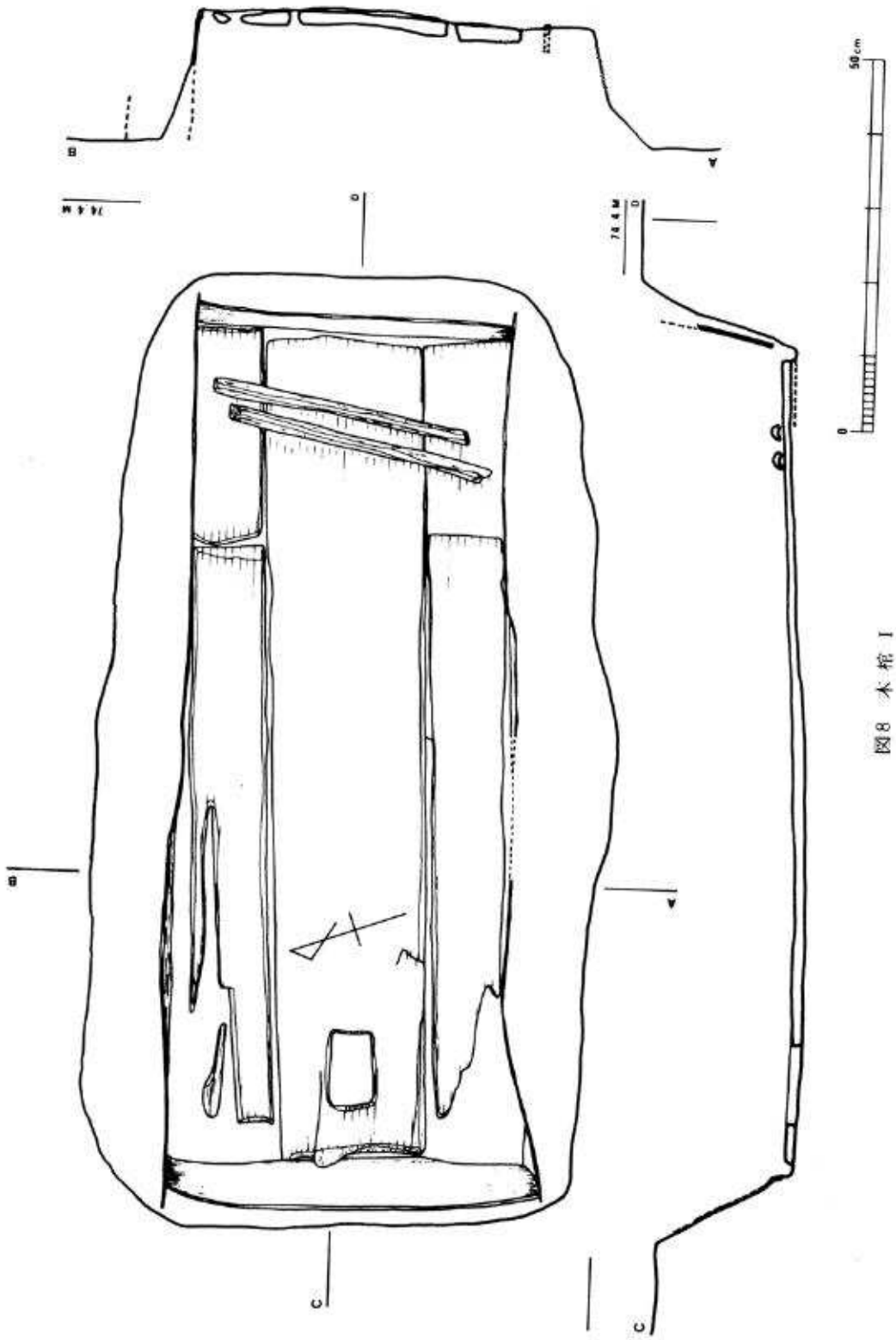


図8 木棺 I

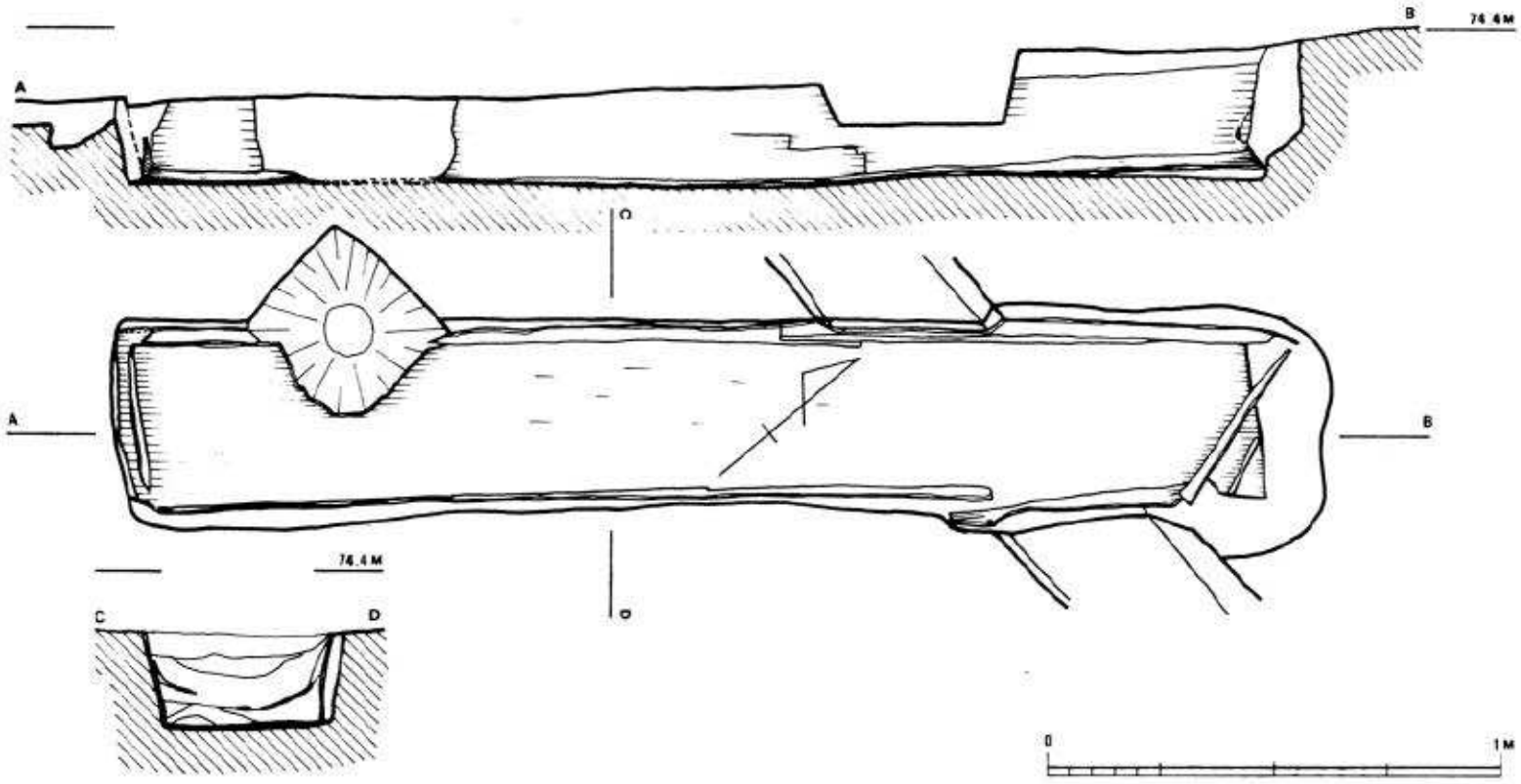


図9　木棺 II

1. 黒褐色土層
2. 黒褐色粘質土層
3. 暗灰褐色砂質土層
4. 砂混り黒色粘質土層
5. 暗灰色砂混り粘質土層
6. 暗灰色砂質土層
7. 暗灰色砂混り粘質土層

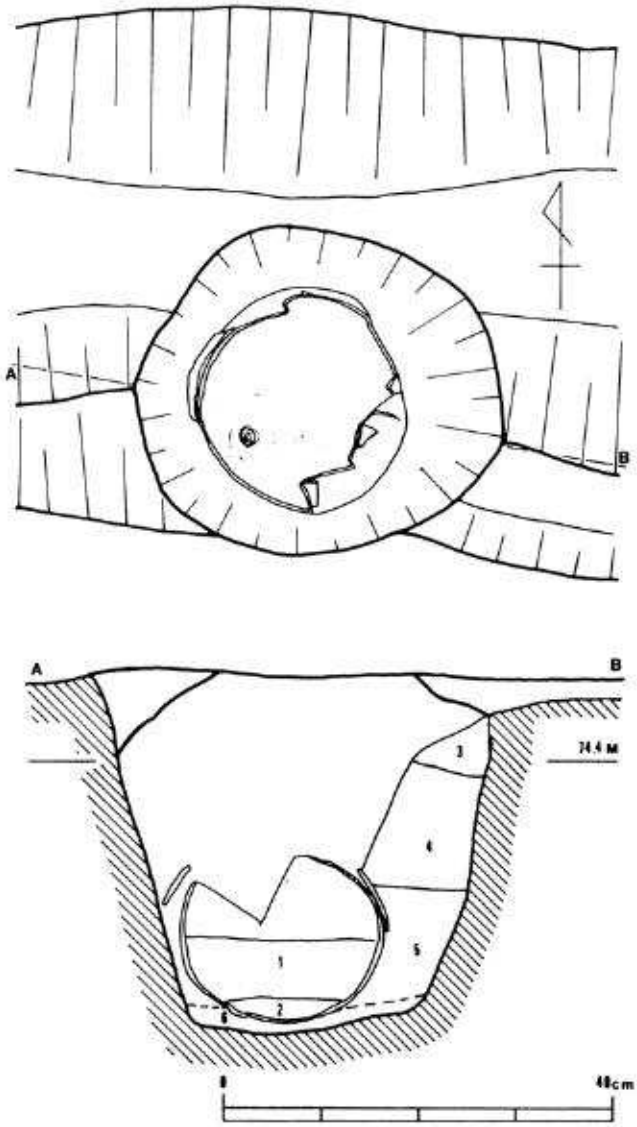


図10　土器棺

1. 黒色粘土層
2. 黒粘混り暗灰色粘砂質土層
3. 白黄淡灰褐色粘質土層
4. 暗灰色粘土混入淡灰色粘質土層
5. 黒色粘質土層
6. 暗灰青色砂質土層

側板が内側に倒れるのをふせいでいる。蓋板は木目の痕跡が底板と同じ方向であり両木口側より中央部に傾斜して検出したので蓋板の木口は木口板上に重っていたと思われるが、側板上には重なっていないと思われる。

棺底板の中央板には一端部に巾約７m、長さ約10cmのほぼ長方形に切り取られ、棺材が再利用材の可能性もある。棺内遺物としては東部分より長さ約36cm、径約２cmの加工木を検出しているが、棺材か副葬品か不明であるこの他の副葬遺物はなく、埋葬時期については縄向Ⅲ式期（庄内式期）より遡ることはないと思われる。

木棺Ⅱ（図版12・13）

この木棺はT12区画で検出したもので、巾約2.7ｍ、巾約0.4ｍの土壙に木棺を埋設している。棺の板組は木棺Ⅰとほぼ同様であるが蓋板が両側板より中央へ傾斜して検出した事から両側板上に重なっていたことが推察できる。棺材については切込のある板や長さのちがう板を使用していることから転用が考えられる。棺内、棺外遺物及び副葬品は検出できず埋葬時期については不明である。

土器棺（図版14）

方形周溝の北角より北約１ｍの地点で検出した。棺は径約40cm、平面ほぼ円形の土壙に体部が球形内面ヘラ削りの壺を首部より上を割り埋納後復元し蓋をし壺の口はやや北東に傾斜した状態で検出した。棺に利用されている壺は口縁部が埋納以前に失なわれているが、壺の底部が若干有ること体部がほぼ球形であり内面篦削りであることから纒向Ⅲ又はⅣ式期（庄内又は布留式期）の壺Ｃタイプと思われる。

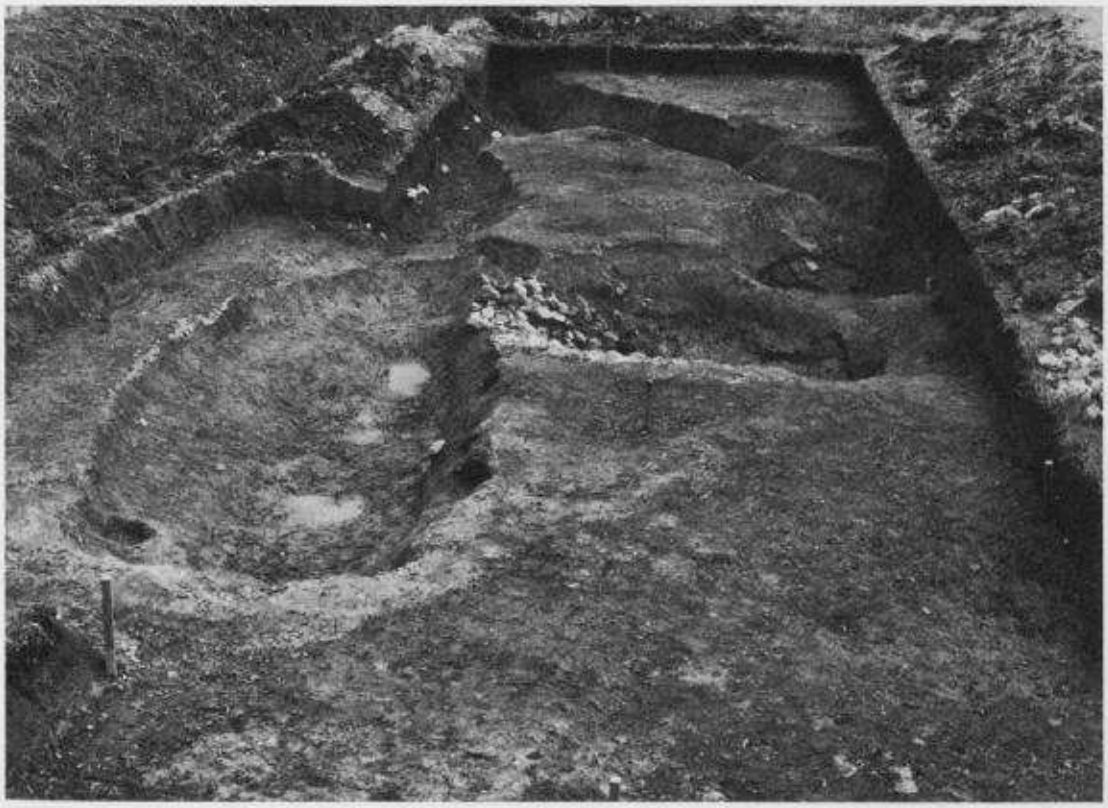
お　わ　り　に

この地域の調査資料は現在整理中により概要を記述する。調査地の旧地形は東南より西北方向へゆるやかに傾斜している。

遺構の遺存状況は学校建設時に削平を受け、遺構上の包含層はほとんど失なわれている。

検出した遺構は土壙・溝・方形周溝・木棺墓・土器棺及び小穴である。各遺構の時期は主として纒向Ⅲ・Ⅳ式期である。方形周溝は纒向Ⅲ式期以後、須恵器が出現する前が考えられる。木棺Ⅰは纒向Ⅳ式期以後、須恵器が出現する以前、木棺Ⅱは、棺内流入土が須恵器を含まない時期の堆積土であるが出土遺物が少なく不明である。木棺等植物遺体は嶋倉巳三郎先生に調査をお願いしております。棺材についてはすべて桧であるとの御教示を受けておりますので、ここに記します。

馬場ワキ地区（東より）



同調査地区（北より）

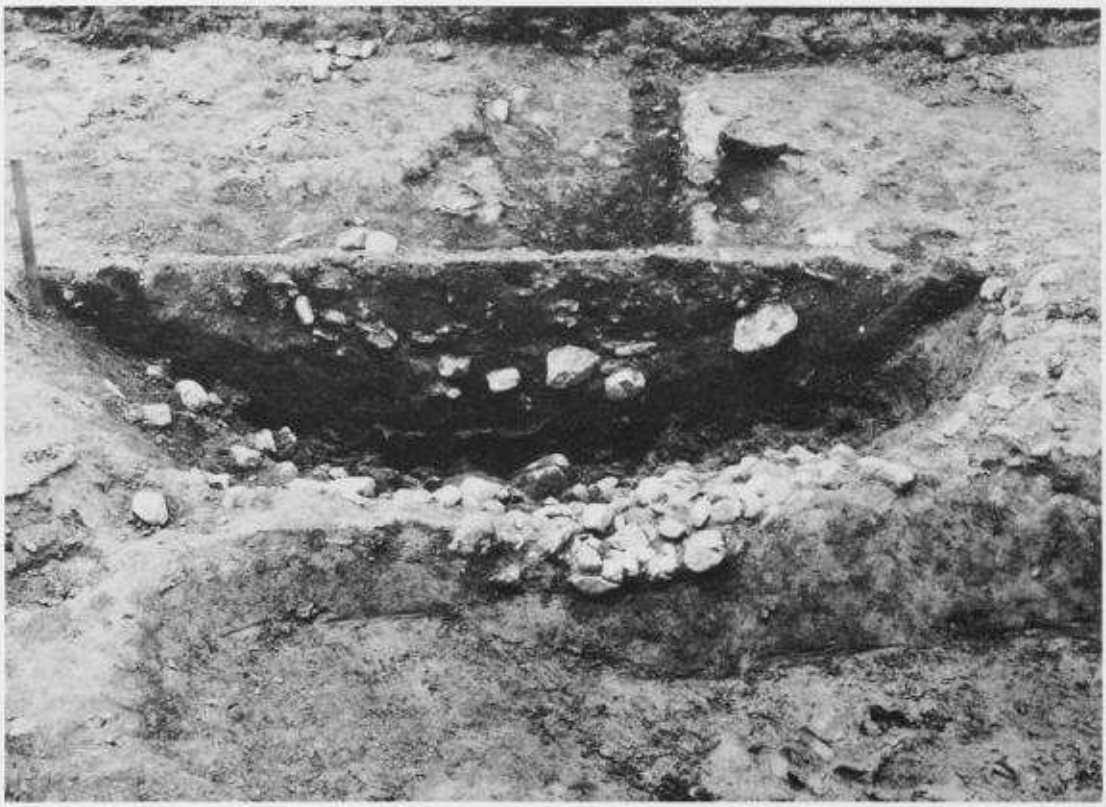
土器留・土壙1（北より）

土器留下の浅い弓形土壙（南より）

図版2

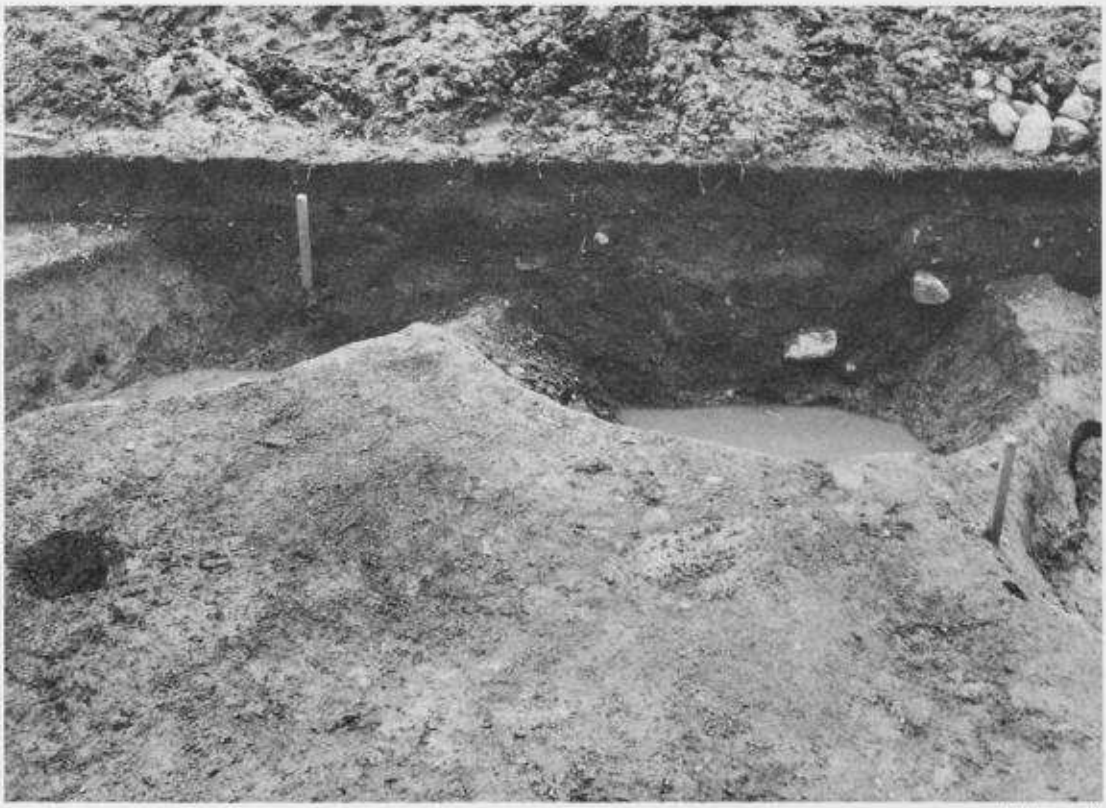
土器留・土壙1（西より）

土器留（土器出土状態）



土壙Ⅰ　南北断面（東より）

土壙Ⅰ（土器出土状態）



土壙Ⅱ・溝

溝（遺物出土状態）

親向小学校跡地（北より）

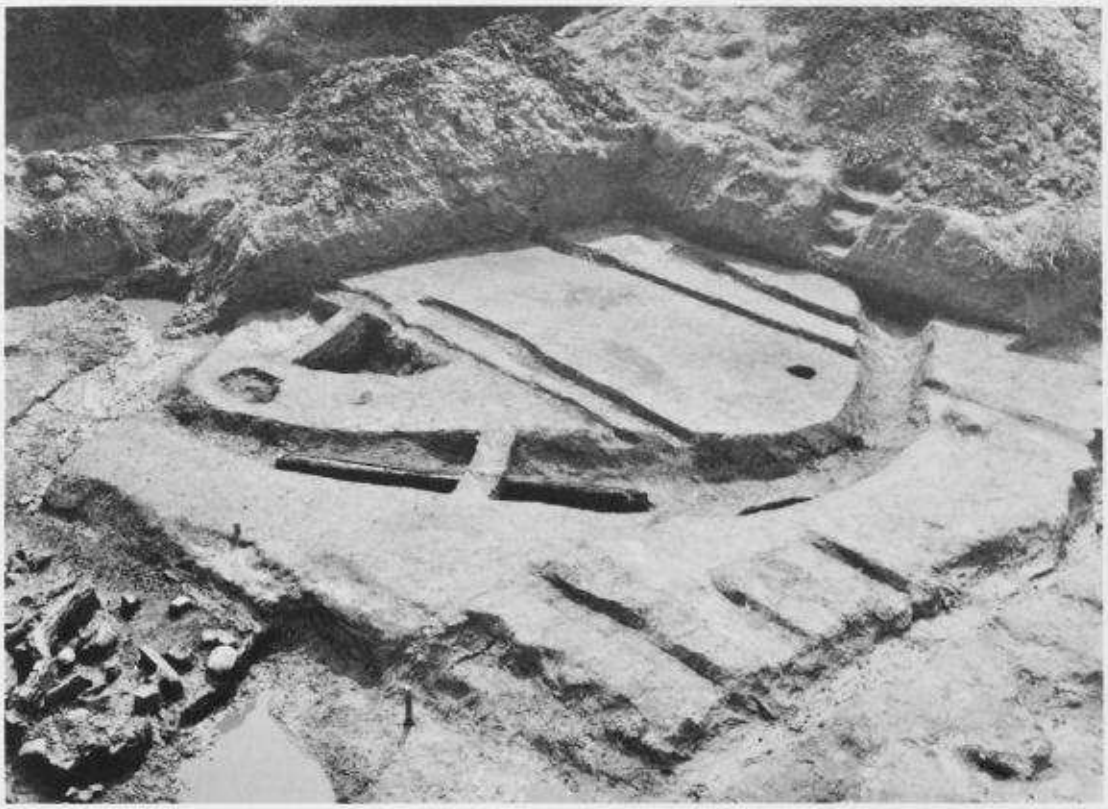
調査区全景（西より）

調査区全景（東より）

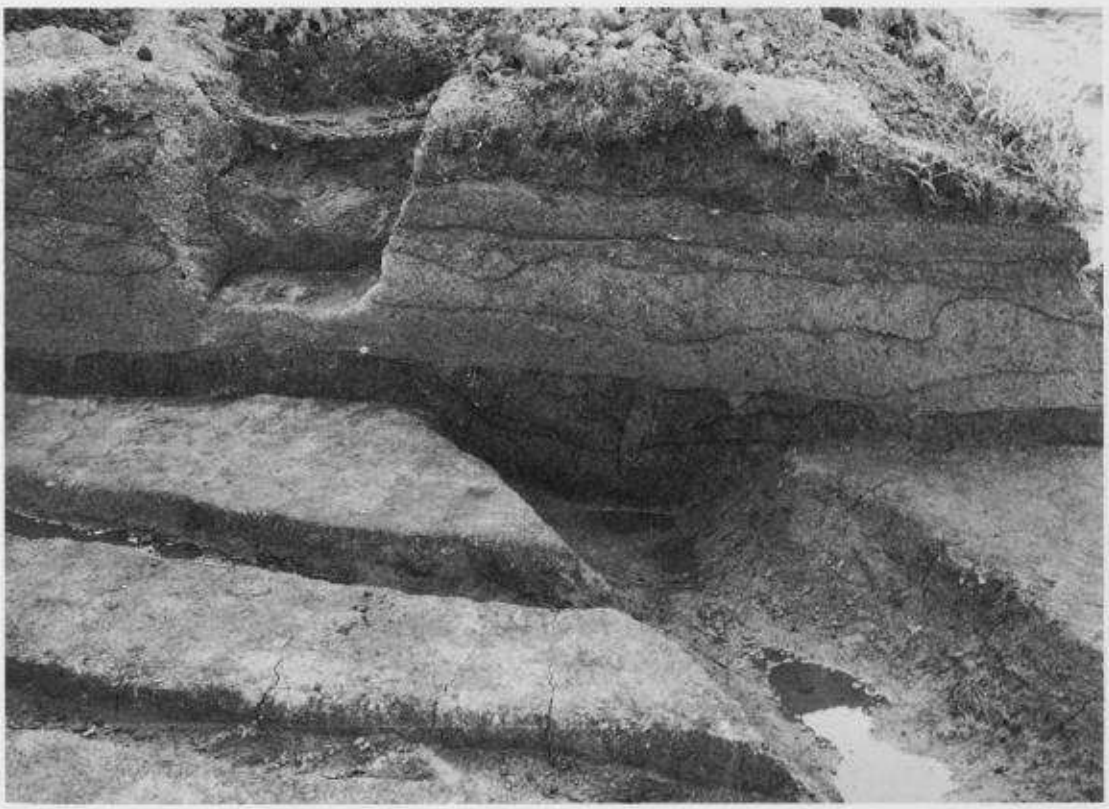
方形周溝・溝1（遺物出土状態）

溝Ⅰ　東西断面（北より）

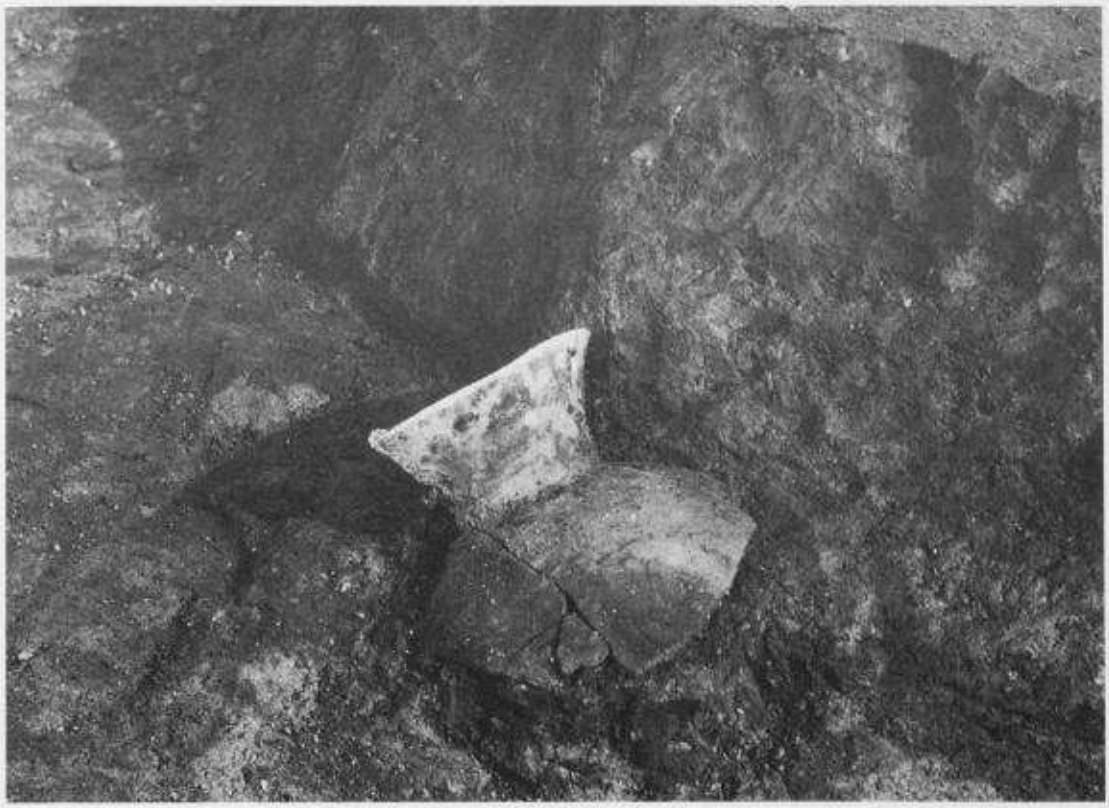
溝Ⅰ（遺物出土状態）



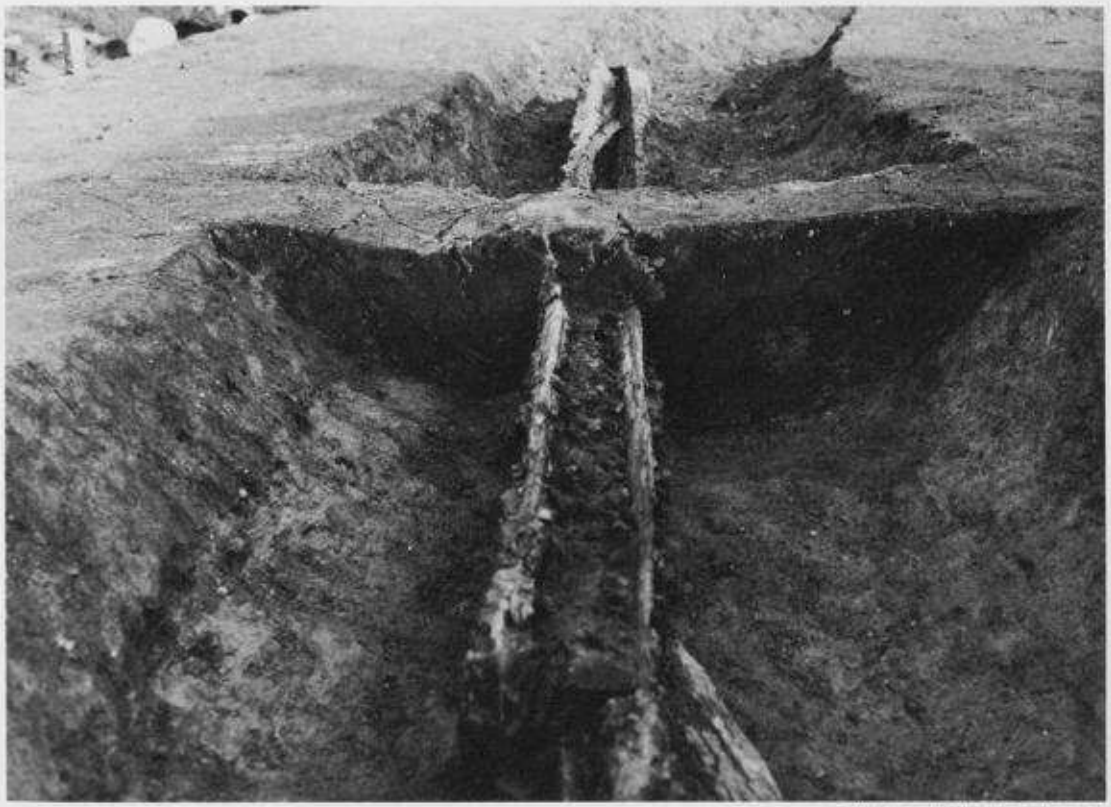
方形周溝（北東より）



周溝断面（東より）



方形周溝（遺物出土状態）

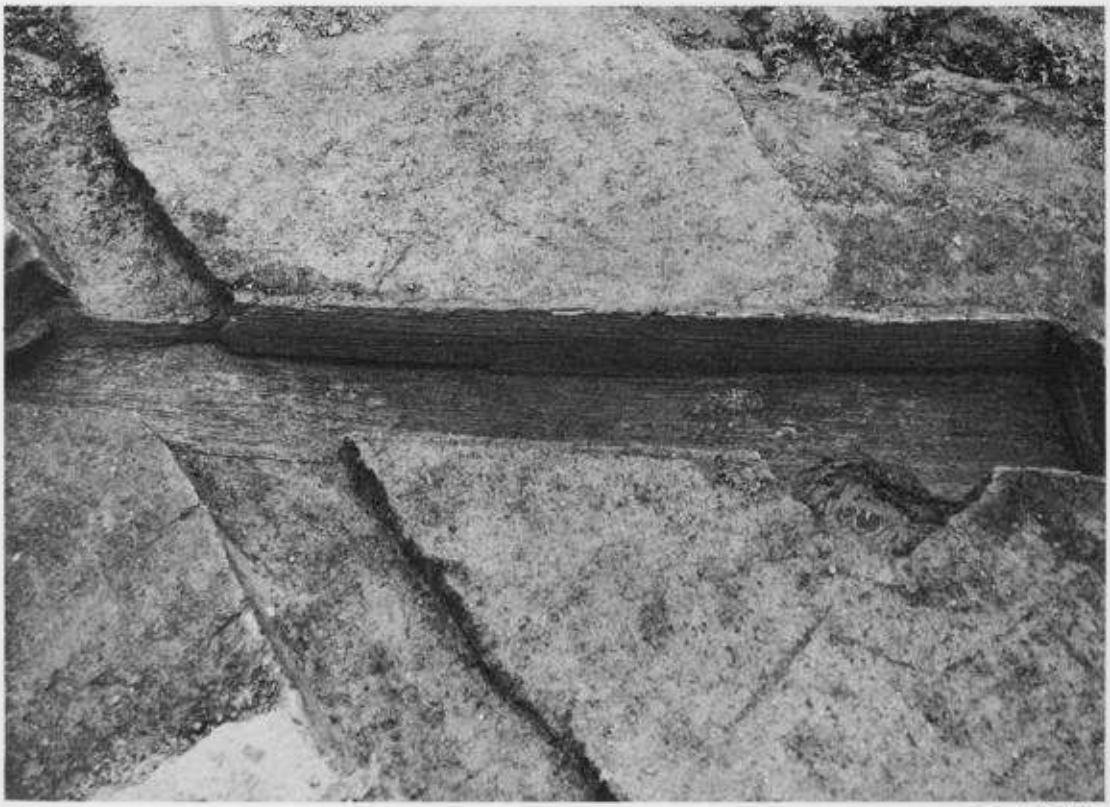


弓形周溝　東溝（断面北より）

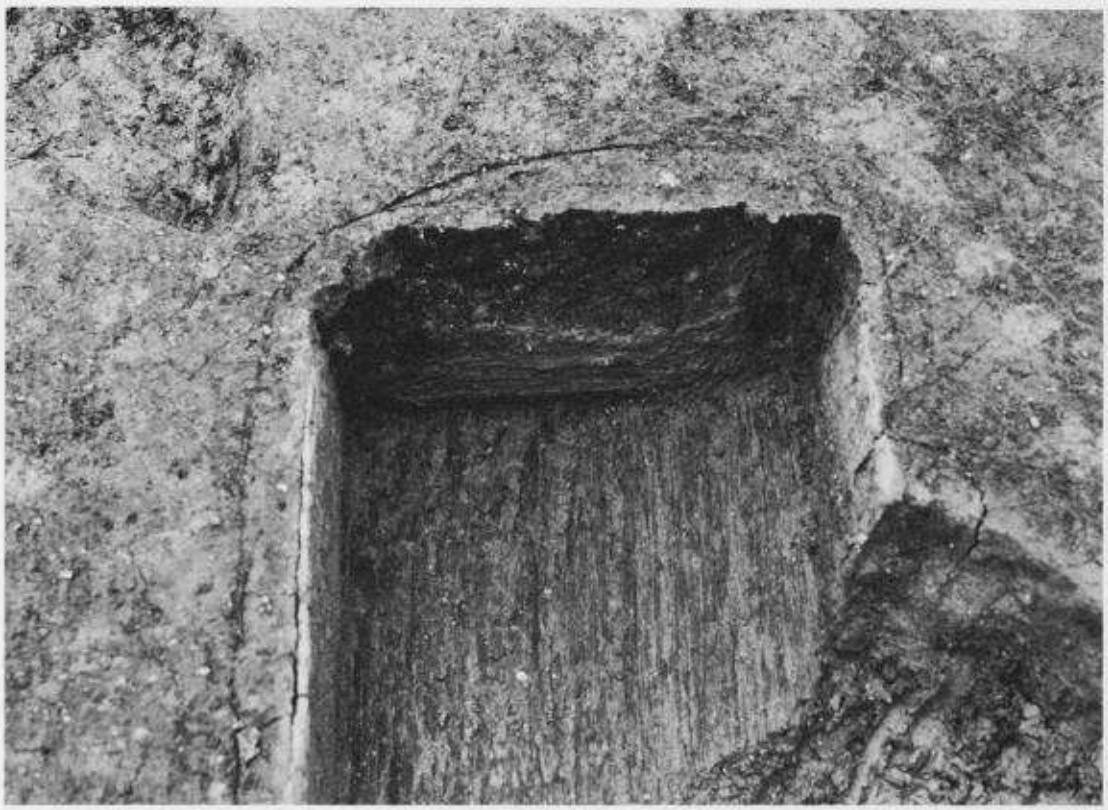
木棺1　（南より）

木棺1北西部　側板・小口板組合せ状態

木棺Ⅱ　（東より）

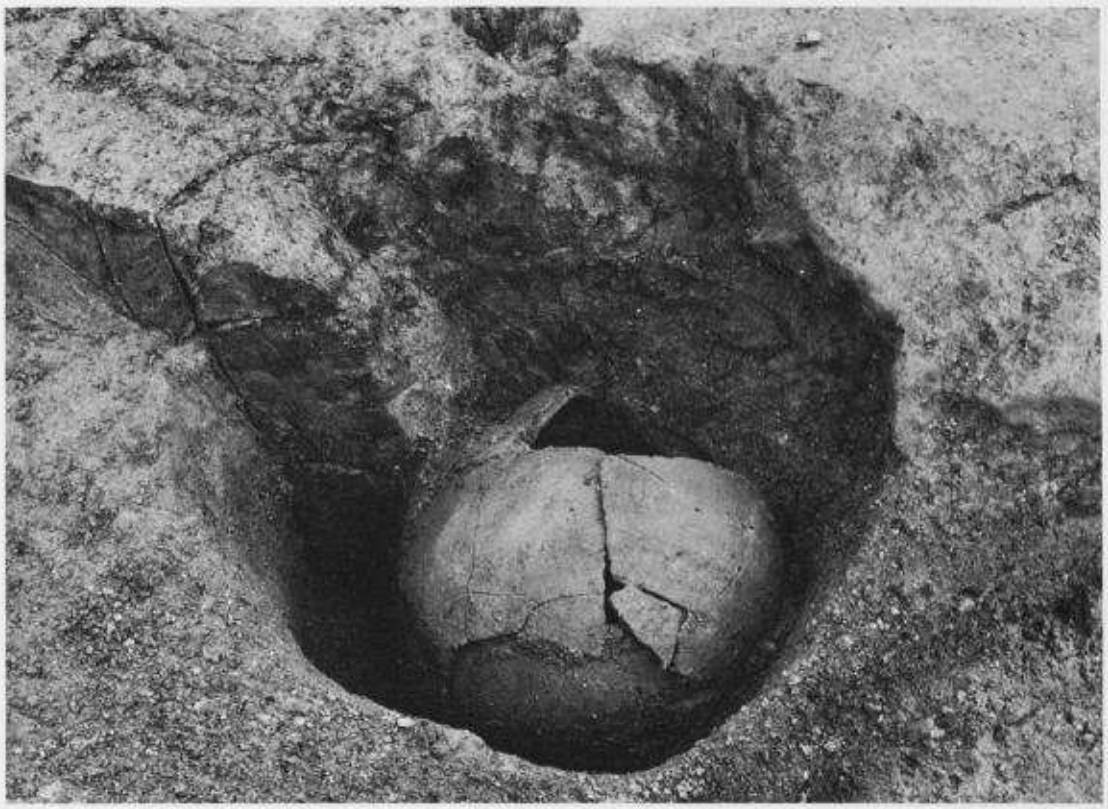


同　（西より）

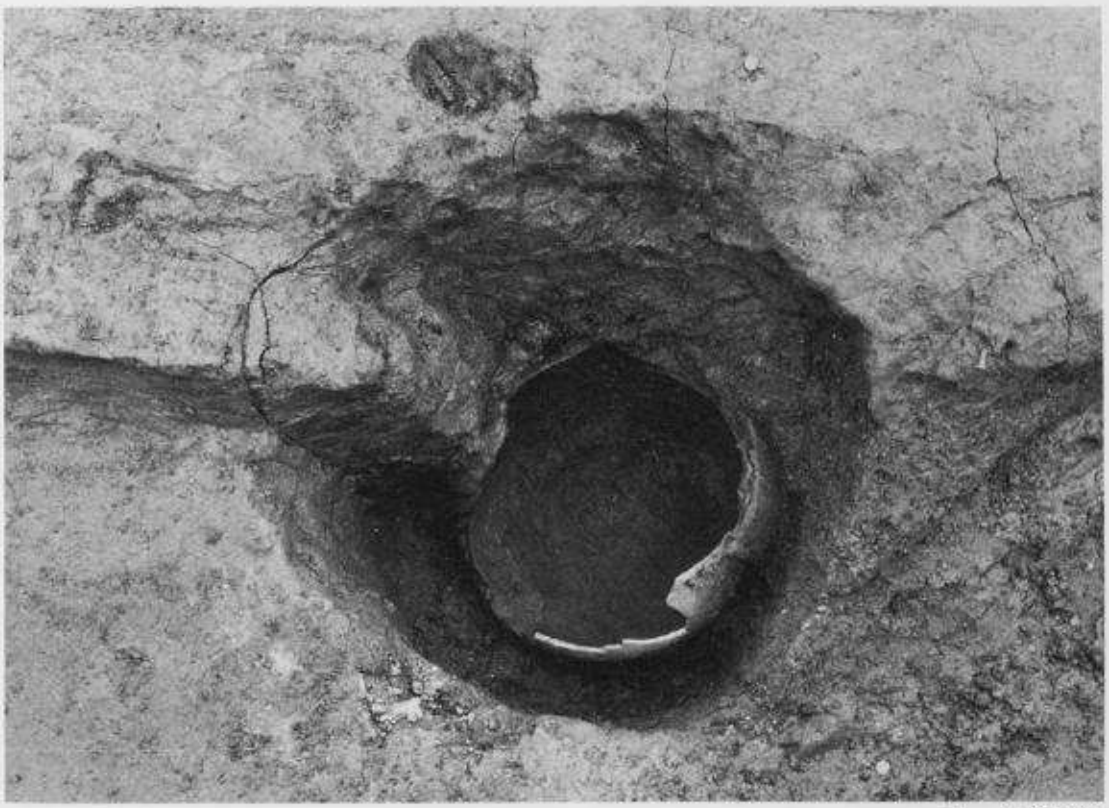


木棺Ⅱ　南小口板

棺内東西断面（南より）



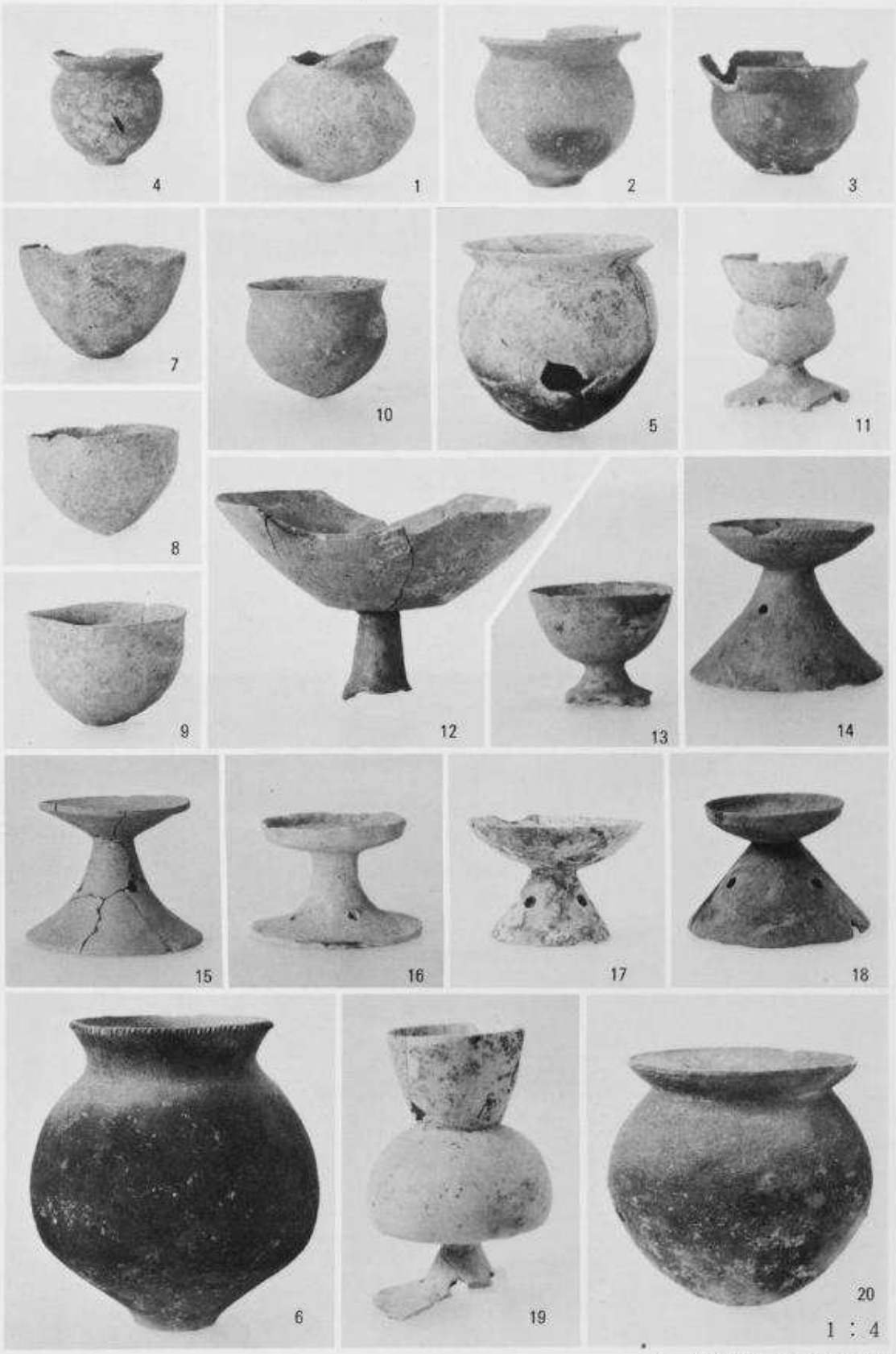
土器棺　（南より）



同　（上部より）

土壙Ⅱ

弓形周溝状溝（東地角断面）



1～16土壙I　17～20土器留

纒向遺跡

昭和55年度遺跡範囲確認発掘調査概報

昭和56年3月　印刷
昭和56年3月　発行

発　行　奈良県桜井市教育委員会
奈良県桜井市大字粟殿432－1

編　集　桜井市教育委員会事務局
社会教育課
07444－2－9111

印　刷　株式会社　奈良明新社
奈良市橋本町36番地
TEL 0742－23－3131